

附属学校国際教育推進委員会報告書（第4集）

～ 2012 年度～

新たな国際教育の展開

— 附属学校の「国際教育拠点」構想実現のために —



2013 年 3 月

筑波大学附属学校教育局

附属学校国際教育推進委員会

目 次

1. はじめに	
さらなる附属学校の国際教育の推進に向けて (附属学校教育局教育局長 東 照雄)	2
2. 附属学校の国際教育	4
(1) 先進的教育技術交流・児童の国際理解を目指して (附属小学校)	11
(2) 附属中学校・2012年度国際教育事業について (附属中学校)	15
(3) アジア諸国との交流推進とグローバル人材の育成 (附属高等学校)	18
(4) 中高6年を通じた国際教育 (附属駒場中・高等学校)	23
(5) 総合学科らしい多角的な国際教育の実現を目指して (附属坂戸高等学校)	28
(6) 国際交流と海外支援活動による国際性を身に付けた人材の輩出 (附属視覚特別支援学校)	32
(7) 附属聴覚特別支援学校における国際教育推進事業 (附属聴覚特別支援学校)	40
(8) 附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告 (附属大塚特別支援学校)	44
(9) 小学部・中学部・高等部全校あげでの国際交流実施 (附属桐ヶ丘特別支援学校)	48
(10) 教師の国際化にかかわる取組と交流について (附属久里浜特別支援学校)	52
(11) JICAボリビア特別支援教育教員養成プロジェクトへの協力 (特別支援教育研究センター)	55
(12) スウェーデン王国・マルメ市特別支援教育視察報告	56
3. おわりに	
未来に向けて (附属学校国際教育推進委員会副委員長 吉沢 祥子)	75

1 はじめに

さらなる附属学校の国際教育の推進に向けて

理事・副学長・附属学校教育局教育長
附属学校国際教育推進委員会委員長 東 照 雄

平成20年度に附属学校教育局に設置された「国際教育推進委員会」は、当時の谷川教育長による“全国的に見ても、国際教育を展開できるのは筑波大学の附属学校しかない”との思い入れに端を発します。時折しも、日本社会の産・官・学の様々な分野で、世界に活躍できるグローバル人材の育成が声高に言われ始めた時期であり、誠に時期を得たものでした。それから6年（実際には平成19年度以前から附属学校においては国際交流等の活動が行われていましたが）、この報告集が第4集目であるように、附属学校における国際教育は着実に推進されて来ました。国際教育推進委員会は、附属学校の「国際教育拠点」の発展の要であり、各附属学校がそれぞれの特徴を活かしながら、お互いに連携して推進して来ました。例えば、今年度の実現した附属特別支援学校5校の教員によるスウェーデンにおける特別支援教育海外視察などはその活動の良い例です。

さて、今年度、国際対応能力を培う「国際教育拠点」の骨格をなすと考えられる附属学校共通のコンセプトが出来ました。それは、1) 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切にすることを養うとともに、積極的に外国の人とのコミュニケーションをとる態度を養う、2) 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、附属として日本や世界のために出来ることを考えるという2つの内容からなります。この共通コンセプトの下に、さらに国際教育を推進して行きましょう。

ところで、小学校から大学院まで共通した国際教育の必要性、言い換えれば、グローバル人材育成は何故必要なのかということに関して、既に論議を尽くされた感がありますが、世界の人類社会の主要な人間の活動分野において、世界は既に一体となり、日々、様々な情報が行きかい経済活動やその諸活動が展開されています。そして、この大きな世界的な流れ（グローバル化）は、年々、その内容と規模を増大させていますし、逆流させることはできません。20年後の世界がどのようになっているか、現在の潮流の延長上に容易に想像できます。その意味で、日本もそして日本人も、真に世界的な視野から物事を考え実現する人材となることが求められています。グローバル人材に必要とされる能力として、語学力、コミュニケーション能力、異文化への理解と日本人としてのアイデンティティー発信能力、そしてこの2つを支える基本的な能力である外国の人と臆せずに積極的に交流・関係を育む態度が良く指摘されます。当然、この能力の育成には、人間の主体性、積極性、挑戦する心、協調性、柔軟性、責任感、使命感などの基本的育成を通して育まれることは明白なことです。

附属学校は、現在の山田学長が掲げた未来構想大学として再出発し、3つの重要な視点の内の1つである国際の視点の下で、各附属学校の特色を活かした国際連携、国際的リーダー育成、国際化対応能力の育成をさらに進めることが求められています。既に、附属学校では、自主性等の育成を教育理念としており、例えば、児童・生徒は主体的に学校行事やその他の活動に関わってきています。この長年培われてきた基本的教育理念は、グローバル人材育成の土台です。この報告集にも報告されてい

るような活動のさらなる推進のために、児童・生徒が、英語に日常的に触れることのできるあらゆる教育環境（機会）、異文化理解を進めることが出来るような外国の人（本学の留学生などを含む）との交流環境（機会）などを現在より格段に充実（増加）させて行くことが肝要です。当然、この実現には予算的な裏付けが必要ですが、外部資金等の活用が重要となってくるでしょう（実際に、附属学校の一部では活用してきた）。最後に、附属学校における国際教育推進の成果は、一朝一夕には得られないでしょうが、児童・生徒達が自分たちの未来を考える時に、世界的な視野で活躍する自分に夢見ることが出来るような筑波大学附属学校の国際教育がさらに推進されることを大いに期待するものです。

2 附属学校の国際教育

国際教育の推進の必要性

なぜ、国際教育は必要なのか？

「ヒト」や「情報」が国境を越えて高速移動している。このため、国際化に対応した能力は、一部の人だけではなく、**誰にでも必要な能力**となってきた。このような社会の中で活躍できる人材を育成することが附属学校の使命。

取引先の担当者が外国人だけど、どう接したらいいの？

海外勤務になったけど、異文化になじめるの？



海外に支店や工場をつくることになったけど、日本とは何が違うの？

グローバル社会で求められる能力とは？

例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などがあげられる。



要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

国際社会における筑波大学の使命

- 21世紀において国際社会へ向けて果たすべき本学の役割は、
 - (1)高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積と発信」
 - (2)国際的リーダーとなる人材の輩出
 - (3)国際的な連携の構築であるとする。

- 筑波大学は、急速にグローバル化が進む世界情勢のなかで、世界をリードする研究型大学としての使命を果たすために、未来を切り拓く知の創造を通じて、地球規模課題に対する解決策を提示することを目指す。

附属学校における取組

「国際化対応能力を培う国際教育拠点」をきっかけ、各校の特色を生かした国際教育を推進

国際化対応能力を培う

国際教育拠点

附属の共通コンセプト

- 幼児・児童・生徒が、個々の発達に応じて、自国や他国の文化を理解し、大切に
態度を養うとともに、積極的に外国の人とコミュニケーションをとる態度を養う。
- 教師が、自国の文化とともに他国の文化を尊重しながら、学校全体の国際化を図り、
附属として日本や世界のために出来ることを考える。

各校の特色を生かした人材育成

【小中高】

小中高での全人教育を通して、世界をも視野に入れた多様な社会で活躍できるように、確かな教科教育、多彩な学校行事や児童生徒の諸活動に裏打ちされた自主的・自律的・自由な人材を育成する。

【駒場】

トップリーダー育成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材育成を図る。

【坂戸】

総合学科ならではの多角的な国際教育を通し、持続発展可能な社会の実現に向け、地球的課題に対し主体的に考察・行動できる人材を育成する。

【視覚】

国際交流等により国際性を身に付けた人材を育成する。

【聴覚】

国際交流でのコミュニケーションを通し、異文化を理解する人材を育成する。また日本語のみならず、海外のことばにも興味・関心持つ人材を育成する。

【大塚】

外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる。

【桐が丘】

国際交流の経験を糧に、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童・生徒を育成する。

【久里浜】

子どもの興味関心に応じた触れあいから、外国や外国人について親しみをもち、相手を知ろうとする気持ちを育む。

附属小・中・高を通じた国際教育

●外国語活動・外国語等

- ・小学校からALTを活用し、中学・高校では日本人英語教師が英語で展開する授業を実施したり、生徒によるプレゼンテーションを行わせたりするなど、聞く・話す活動を重視
- ・中学校では、英語でのALTの授業を二人制で行い、英語によるコミュニケーションの機会を増やすことで語学力を向上。また、週2回ALTが常駐するイングリッシュルームを設置し、放課後に生徒が自由に活用できる時間と空間を保証
- ・高校では、英語のほかに第二外国語(独・仏・中)を選択履修

●総合学習や特別活動等での取組

- ・小学校・中学校では、総合学習の時間を活用した異文化理解。(小学校では、外国の生活や文化など身近なことを題材として学習を実施。中学校では、外国人教師に総合学習に加わってもらう。)
- ・小学校では、多機能教室「未来の教室」を活用した国際教育を実施
- ・中学校では、特別活動で外国人講師による国際理解教育の実施
- ・中学・高校では、海外生活経験者や国際的に活躍している卒業生等を招いての講演会の実施
- ・高校では英字新聞部の英字新聞の発行(ESSの活動)
- ・小中高を通じて、オリンピック教育を通じた国際理解・国際平和教育を実施

●外国人との交流

- ・小学校では、遊びの紹介など、身近なことを題材にして留学生と交流
- ・中学校では、中国の学校からの修学旅行生を受け入れ、授業参加や交流会を実施。シンガポールHwaChong校の生徒との交流会を高校で実施
- ・高校では、毎年、中国北京市、シンガポールHwaChong校の生徒を受け入れ、授業参加や交流会を実施

●海外経験の機会の確保

- ・小学校では、スタンフォード大学やミルズ大学を訪問し交流を図ることや、中学ではアメリカ短期留学などを開始
- ・中学・高校では、シンガポールHwaChong校との交換留学を実施
- ・高校では、シンガポールHwaChong校のアジア太平洋青少年リーダーズサミットへ第1回から毎年3名の生徒を派遣、北京市高校への生徒派遣

●児童・生徒を育成する教師の国際化

- ・小中高を通じて教員の海外派遣を行うことにより教員の国際理解の深化や国際感覚を育成
- ・高校では、教員の英語研修の実施により、生徒の海外渡航への付き添いを視野に入れ、教員の国際化を目指す

附属小・中・高を通じた国際教育



English RoomでのALTと生徒との会話の様子(附属中学校)



少人数の授業風景(附属中学校)



アジア太平洋青少年リーダーズサミットでの発表(附属高校)



スタンフォード大学・ミルズ大学視察(附属小学校)



日韓授業交流授業技術研修会(附属小学校)



国際的な活躍をする卒業生の講演(附属高校)

駒場中・高を通じた国際教育

●英語の授業等でのプレゼンテーション能力の育成

- ・学期ごとにALTとの授業などで口頭発表を評価に反映
→学年が進むに従い、ロール・プレイ、ショウ・アンド・テル、リテリング、スピーチ、プレゼンテーション、ディベートなど
- ・プレゼンテーション・コーチを招き、希望者対象の講習
- ・総合学習での外国人研究者による授業(中3・高2)
→外国人研究者によるサイエンスダイアログ

●国内での交流

- ・筑波大学外国人教員研修留学生との交流
→音楽祭、文化祭、授業への参観・参加
- ・在日若手外交官と高校生の交流
→在日外交官が日本語ブラッシュアップ研修として来校、生徒との自国紹介、プレゼンテーションやグループディスカッション
- ・海外からの訪問団との交流

在日若手外交官との交流



釜山国際高校との相互文化交流



東芝地球未来会議



●海外での交流

- ・台湾台中第一高級中学での生徒研究交流会
①授業での交流(数学・物理)
②英語による学校紹介・研究発表会
- ・韓国釜山国際高等学校との相互文化交流
相互に学校訪問し、授業参加、学校紹介など
- ・東芝地球未来会議への参加(タイ国開催)
- ・コアSSH校との提携による生徒の海外派遣(台湾、豪州、米国)
- ・国際科学コンクールへの参加

●教師の国際化

- ・ACCU(ユネスコアジア文化センター)による教員の海外派遣
- ・生徒の海外派遣に伴う引率や現地での教員プログラム
- ・ユネスコスクール全国大会への教員派遣
- ・生徒対象のプレゼンテーション講座へ教員も参加
- ・海外からの教員視察の際の対応



台中一中での研究発表

坂戸高校での国際教育

●交流

- ・インドネシア、ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校の交流
- ・アジア隣人プログラム(トヨタ財団)
インドネシアと本校生の協働による地域のゴミ問題の解決方法の提案と実践(相互訪問およびインターネットを利用した協働活動)
- ・海外の生徒を招き「高校生国際ESDシンポジウム」を開催
- ・アジア高校生による聞き書きプロジェクト
- ・国際農学ESDシンポジウムへの参加
「卒業研究」やアジア隣人プログラムなどの成果を発表
- ・海外での校外学習の実施(平成25年度からは3ヶ国で)
- ・海外からの教員視察や留学生の積極的な受入れ
- ・本校生徒の留学の推進



インドネシア訪問
(アジア隣人プログラム)

●特色ある教育課程

- ・国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム
国際的視野に立つテーマで研究しようとする生徒に渡航費を援助
- ・教科「国際」の各科目を開講(2012年度より)
「国際社会」「Discussion & Debate」「比較文化論」「Global Studies」の4科目



海外高校生を招いてのシンポジウム(in坂戸高校)

●教師の国際化

- ・教員の海外派遣
- ・ユネスコスクール全国大会への教員派遣
- ・校内研修会で国際教育・ESDについて研修
- ・海外からの教員視察の受入れ



国際農学ESDシンポジウムでの聞き書きプロジェクトのポスター発表

視覚特別支援学校での国際教育

●学習

- ・小学部5年からの英語授業導入
- ・高等部専攻科鍼灸手技療法科に各学年2名の留学生枠
- ・高等部専攻科音楽科に外国人留学生在籍

●交流

- ・小学部 国際NGOワールド・ビジョン・ジャパンへ社会見学
- ・高等部普通科国際交流部で外国人やインド学生との交流
- ・専攻科英語クラブでインド人学生との交流
- ・外国人留学生との日常生活を通しての交流と相互理解
- ・NPO法人Hands On Tokyoと連携してミニ移動動物園開催
- ・ロンドンパラリンピックでの金メダル獲得、世界大会参加

●教師の国際化

- ・児童・生徒の教育・交流活動のサポートを通じた国際化
- ・国際支援を通じての国際化
- ・海外からの見学者への対応

●国際貢献

- ・タイ視覚障害児の理数科基礎教育に関する教員の資質向上支援プロジェクト
- ・インド共和国における視覚障害者の職業教育支援事業
- ・ロンドンパラリンピックへの役員派遣



ワークショップ(タイ視覚障害児の理数科基礎教育に関する教員の資質向上支援プロジェクト)

高校生として初めてパラリンピック金メダル獲得の快挙を成し遂げた若杉選手の表彰式



化学の授業(インド共和国における視覚障害者の職業教育支援事業)

聴覚特別支援学校での国際教育

●交流

- ・国立バリ壘学校との姉妹校交流
7月に国立バリ壘学校の教員3名が来校し、授業見学や近く実施予定の生徒間の相互訪問交流について意見交換を実施。
1月には本校5名が訪仏し、バリ壘学校の職業教育の内容等を研修した。また相互訪問交流の継続審議を行った。スカイプを使って本校寄宿舎生がバリ壘学校の先生方と交流も持った。また生徒の作品や研究出版物の交換なども行った。
- ・ミュンヘン大学の学生が来校、本校高等部生と交流会を持った。
- ・フィリピンからの聴覚障害の研修生の講演会を実施。交流会も持った。

●教師の国際化

- ・APCDアジア・太平洋地域聴覚障害問題会議(シンガポール大会)で発表
- ・台湾の台南大学と教材の共同開発と指導法の研究を実施。

●国際貢献

- ・美術観賞用ICT教材の韓国語翻訳と日韓の学校での活用
- ・ミャンマー社会福祉行政官育成プロジェクト研修「ミャンマー手話教授法 中・上級編」を実施
- ・NPOアジアマインド「ミャンマー国の壘学校の教員の日本研修」実施



国立バリ壘学校の教員とともに

スカイプを使って本校寄宿舎生がバリ壘学校の先生方と交流



台南大学の先生との協議

大塚特別支援学校での国際教育

●交流

- ・ボリビア人研修生とのダンス交流
- ・海外の手作り楽器の作成と音楽交流
- ・筑波大学大学院海外教員研修留学生との交流授業

●総合学習や特別活動等での取組

- ・ジャマイカ大使館訪問
- ・簡単なあいさつ、国旗、地理などの学習
- ・海外からのお客様への作業製品の紹介とプレゼントづくり
- ・オリンピック教育を通じた国際理解・国際平和教育を実施

●教師の国際化

- ・JICA研修員の受け入れ
- ・教員の海外派遣
- ・韓国大邱保明学校との研究交流



ボリビア人研修生とのダンスや音楽をテーマにした交流授業



ジャマイカ大使館訪問



大塚祭でのオリンピックをテーマにした学習発表



大邱保明学校との研究交流

桐が丘特別支援学校での国際教育

●交流

- ・大韓民国・三育再活学校との交流
小・中・高代表児童生徒訪韓
インターネットを用いた遠隔地授業
- ・筑波大学大学院海外教員研修留学生と高等部生徒の交流授業(年1回)

●総合学習や特別活動等での取組

- ・高等部生徒が自分たちで交流内容を設定し、筑波大学を訪問して海外研修留学生と打ち合わせ
- ・総合的な学習の時間に交流授業(バリアフリー、ボランティア・社会活動、ファッション)

●外国語活動・外国語等

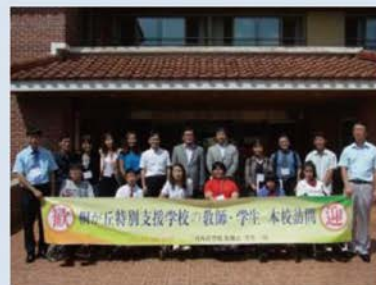
- ・小5・6の外国語活動と中1～高2の英語の授業で、週1回ALTとのコミュニケーション能力育成(英会話やスピーチ等)
- ・文化祭での発表
- ・高円宮杯英語弁論大会に中3生徒参加

●教師の国際化

- ・大韓民国・三育再活学校教員との相互交流による研究、教育課程等の情報交換、研究報告書の交換
- ・海外からの教員視察やJICA研修員の受入
- ・スウェーデンの特別支援教育機関の視察

●国際貢献

- ・ボリビアの教員の資質向上支援プロジェクト



大韓民国・三育再活学校との交流



海外研修留学生との交流



高円宮杯英語弁論大会

久里浜特別支援学校での国際教育

●交流

- ・中国浙江省寧波市達敏学校との姉妹校締結による交流
- ・海外からのお客様との交流
(カンボジア・インドネシア・ボリビア等)

●教師の国際化

- ・中国達敏学校との姉妹校交流(ウェブ会議、達敏学校に教員派遣し事例研究会)
- ・寧波市で自閉症教育にかかわる機関を視察
- ・自閉症教育先進国への視察又は招聘による研修(アメリカ)



アメリカから講師を招聘して行われた
TEACCH自閉症研修



インドネシア教育文化省特別支援教育・インドネシア教育大学等のお客様と子供のかかわり



ボリビア国特別支援教育研修

先進的教育技術交流・児童の国際理解を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属小学校（以下「本校」）は、国内の教育研究校としての使命、責任感をもって教育研究を進めている。その成果を生かして、海外教育技術支援、海外教育技術交流を行い、相互の教育技術の高まりをめざし、国際教育を推進している。

本年度は、グローバル化を研究の一つの核として、組織的に取り組んできた。まず、本校の研究を推進する研究企画部が中心となり、①海外校との授業交流、②児童の海外交流、③児童の国際理解環境の充実の3本を柱にして、各担当役割を組織し、研究を進めてきた。グローバル化の実現のためには、全校をあげての組織的、かつ長期的な継続を視野にした研究を進めることが必要だと感じている。

- | | |
|---------------|------------------------------------|
| ①海外校との授業交流 | 韓国との相互訪問における授業交流、JICA研修員の受け入れ |
| ②児童の海外交流 | スタンフォード大学、ミルズ大学との児童交流 |
| ③児童の国際理解環境の充実 | 留学生との交流、3年生からの英語活動「未来の教室」を活用した国際教育 |



日韓授業交流会



ミルズ大学附属小学校との交流



スタンフォード大学ゼミ参加



留学生と児童の交流会

2 活動の具体

(1)「日韓授業技術交流会」

1 概要

本校職員が韓国に出向いての日韓「授業技術交流会」は、本年度で6回目となる。継続した授業交流により、相互に影響を受けながら授業技術の向上をめざしている。

本年度は、韓国の先生による授業、本校教諭による現地児童への授業、本校副校長の模擬授業、講演を開催した。韓国の先生が算数、理科、社会、本校の教諭が算数、体育、理科の授業を行った。また、授業を行うだけではなく、協議会、質疑応答を行うことで、より深い技術交流の成果が得られた。韓国の児童は、よく考え、積極的に行動する子が多い。日本も頑張らないといけないという思いが高まり刺激を受ける5日間になった。

2 交流の実際と日程

(1) 期 日 平成24年10月7日～11日

(2) 会 場 完州上関初等学校 光州市松源初等学校 昌原研究会

(3) 参加教員 細水保宏（副校長・算数）夏坂哲志（算数）鷲見辰美（理科）清水由（体育）

(4) 授業交流



韓国の先生方による授業（理科 空気を感ずる 社会 民事裁判について）と協議会



本校教諭による授業（算数 数の規則 理科 モンシロチョウ 体育 しっぽとり・ボール）



3つの州の学校をを4日間で回り、授業交流、協議会を行った。4日間とも高速バスでの数時間の移動があり、ハードスケジュールになったが、日本と韓国の教育が抱える問題の共通点や、文化の違いからくる指導観の違いを理解することができた。

本校教諭による授業以外にも、本校副校長による模擬授業、意見交換会もあり、お互いの教員が学ぶことができる4日間であった。

←副校長による韓国の先生方を相手にした模擬授業

(2)ー1「サンフランシスコ児童交流会」(スタンフォード大学・ミルズ大学附属小学校交流)

1 概要

「サンフランシスコ児童交流会」はグローバル人材育成の新たな試みとして、平成25年3月に希望児童を対象に実施予定の計画である。この児童交流会は、実体験を伴った英語学習や現地児童との交流を通して異文化理解を深めるだけでなく、スタンフォード大学の見学や大学生との交流によって将来グローバルに活躍できる人材の礎を築くキャリア教育の目的としても行われる。

本研修は、スタンフォード大学や交流先の小学校との事前打ち合わせと下見を兼ねながら、現地の先生方との授業交流を通して日米の教育について理解を深めるものである。

2 交流の実際と日程

(1) 期 日 平成24年10月7日～11日

(2) 会 場 スタンフォード大学 ミルズ大学附属小学校 ポンデローサ小学校

(3) 参加教員 田中博史企画部長(算数) 高倉弘光(音楽) 荒井和枝(英語)

(4) 研修内容

本研修では大きく三つの目的を理由に実施された。

①スタンフォード大学、現地のホテルや見学場所などの事前下見を行う。

- ・スタンフォード大学卒業生と児童交流の活動内容について打ち合わせを行う。村田亜季准教授のゼミに参加し、大学院生と日本とアメリカの教育についてディスカッションを行う。

②児童交流を予定している小学校との打ち合わせ、準備交流会実施に向けた準備を行う。

- ・児童が交流を予定している現地校のポンデローサ小学校、ヌエベ小学校の先生方との打ち合わせ、学校施設の見学、安全面や配慮が必要なことについての事前視察を行う。

③教員による海外交流を深め、授業研究を現地の先生方と行う。

- ・これまで算数教科で交流のあったミルズ大学附属小学校を訪れ、現地の先生方との交流会を実施する。また、音楽でも本校教員が授業を行い、日米の授業スタイルの違いを明らかにしながら、授業研究を行い3月の交流会に役立てる。



本校教諭による授業(算数 3桁+3桁の足し算 音楽 リズム遊び)



授業後には、現地の先生方とパネルディスカッションを行う。子どもによる理解度の違いやその差を埋めながらいかに指導していくのか、理解が低い子どもへの対処など日本でも常に話題となることがアメリカでも関心が高くどのように授業を進めることが可能か日米の教師で有意義な議論がなされた。

←現地の先生方とのパネルディスカッション

(2)ー2「サンフランシスコ児童交流会」計画

実施は3月の予定であり、現在は保護者への説明会、計画準備段階である。参加希望者は、4年生81名であり、安全性等を考慮して、各クラス男女3名ずつ計24名の参加者を抽選で決定した。サンフランシスコ海外研修の予定は次のようになる。

平成25年3月24日 成田発 17時				
3月24日	午前10時到着	サンフランシスコ国際空港到着	移動	バス
				シェラトンホテル 泊
3月25日	午前	現地小学校との交流会	ポンデサール	移動 バス
	午後	スタンフォード大学研修会		シェラトンホテル 泊
3月26日	午前	現地小学校との交流会	ポンデサール	移動 バス
	午後	スタンフォード大学自主研修		シェラトンホテル 泊
3月27日	午前	現地小学校との交流会	ヌエベ	移動 バス
	午後	サンフランシスコ市内観光		ヒルトン・ユニオンスクエア 泊
3月28日	終日	フリータイム		ヒルトン・ユニオンスクエア 泊
3月29日	集合時間まで自由 バスにて空港へ			
3月30日	帰国			

保護者には、次のような注意を伝えた。

自費参加の研修であること（見積書大人25万円 子ども23万円）

行き9時間、帰11時間の長旅であり、体力的なことも十分、鑑みてご参加を判断すること

現地では保護者が授業参観をするという文化がないため、保護者は別行動となること

米国は医療保険など日本とはまったく事情が異なること

参加直前の10日間は特別研修が昼休みに行われること

(3) 留学生と児童の交流会・夢の教室設置



自己紹介ゲーム



連想ゲーム



一緒に給食を食べる

海外へ出かけることは、全員の児童を対象にした場合難しさがある。しかし、留学生との交流は、全員の児童に対する国際理解の芽を育むことができる。3年生からのALTによる英語授業と合わせて、児童が学校にいながら、異文化に触れる機会を増やしていくことに取り組んでいる。

また、教育環境のグローバル化を目指し、情報・ICT教育研究部門を組織し、ハードの面からの環境整備も進めている。各所の設備見学、設計見積もりが終わり、「夢の教室」の設備が年度末には完成予定である。

今後も研究企画部、英語活動部、国際理解推進部、情報・IDT部が中心となり、長期的な視野をもって、先進教育技術交流、児童の国際理解を深めていきたいと考えている。

2012年度国際教育事業について

本年度、本校の国際教育事業については新たな展開があった。

一つは、アメリカ短期留学試行の実現である。数年続いているシンガポールとの交流に加えて、アメリカへ生徒を派遣することを2011年度より委員会で検討を始めていたが、2011年度末に視察を実施、本年度の教官会議で数度にわたり検討した結果、試行を始めることが決まった。

もう一つは、今年度の後期に、国際教育推進の一つとして英語教育の充実のための予算が下りたことである。具体的には、今まで英語授業はすべて41名のクラスサイズであったが、A L Tの時間のみ、半数で行うことができた。又、A L Tが来校する日の放課後と昼休みに、A L Tと自由に英語を話せる「イングリッシュルーム」を開設した。いずれも詳しくは後述する。

① Hwa Chong Institution との短期交換留学

附属中の生徒がシンガポールに滞在

3月23日～4月4日に中学3年生（当時）2名が附属高校生とともに HCI へ短期留学した。例年前後半で分担していた引率を今年は1名の教員が全期間担当した。今年は、附属高校へ進学して、次年度にホームステイの受け入れをすることが参加の条件になったことや、男女各1名しか行けない（前年度は3名の枠）ことが影響してか、応募は例年に比べて半減し、11名であったが、3学年担任団の選考により参加者を決定した。今年度は期間も長く、十分に Hwa Chong Institution との交流ができたと思われる。ただ、戦跡など残るシンガポールに行くのに、歴史的背景などの事前学習が十分できたかという点、この点は疑問が残るというのが引率の社会科教員の感想である。

2013年度末にも中学3年生が3月27日～4月7日、附属高校生とシンガポールに行く予定である。今年は3名に増え、現在募集中である。

HCI の生徒が日本に滞在

シンガポールの Hwa Chong Institution の生徒が今年も11月に附属高校に短期留学に来日した。その折り、附属中学の生徒が11月15日放課後に附属高校会議室に行き、ミニ交流会を行った。会の準備・運営は生徒会の交流会準備小委員会が中心になって行ったが、生徒会委員長陣3名や、交流会委員以外の希望者も参加し、にぎやかな会となった。会議室のテーブル一つに中学生8～9名、シンガポールの生徒が2名入り、それぞれの学校生活や日常生活を英語で伝え合っていた。3年生は、さすがに臆することなく話しており、日頃の成果がよく出ていた。また1年生も上級生の盛り上げた会話の中で、一生懸命話す姿がほほえましかった。最後にはグループで写真を撮ったりしていた。

ホワチョンを訪ねた生徒たち



歓迎会の様子



②アメリカ短期留学試行開始

3月、留学仲介の会社 I S A の案内で、ペンシルバニア州と周辺の学校 7 校を教員 1 名が視察した。いずれの学校でも管理職の方々が校内を案内してくださり、業者任せでなく教員自らが足を運ぶ意義が感じられた。本年度の検討の結果、2012年度末の春休みから短期留学の試行を開始することが10月に決定した。対象は2，3年生。秋休み明けに募集し、11月3日に附属学校教育局にて関心のある生徒・保護者向けの説明会を開いた。11月14日募集締め切り、12月3日参加者発表、12月4日保護者同伴の説明会、1月19日、2月26日事前研修会、3月2日直前オリエンテーション、3月20日～29日現地。という予定である。受け入れはメリーランド州のチャペルゲイト高校が予定されている。

視察先の学校



説明会の様子



②少人数英語授業

今年度後期についた予算で、ALTの非常勤講師をもう1名採用し、1年と2年で週に1回のALTの授業を半数で行うことができるようになった。出席番号で2つにわけ、1つのグループは図書室を利用している。通常50秒で行うインタビューテストに2倍の時間をかけて実施でき、質疑まで充実して行うことができる。一人一人がALTとやりとりできる機会が増え、距離も近くなった。来年以降もぜひ継続させたい。

少人数授業



③イングリッシュルーム

ALT が来校する日の昼休みと放課後、希望者が自由に英語を話しに来るイングリッシュルームを開設した。放送室隣のスタジオだった小部屋にテーブル・カーテンを新調し利用している。友人同士2～3人のグループで予約をして話しに来る。3年生の女子が最も積極的だが、3年生男子生徒も多く、2年生、1年生の利用もある。英語好きな生徒にとっては、又とない場であり、常連も多い。今後ますます発展させていきたい。

イングリッシュルームの様子



④海外からの授業参観の受け入れ

本年度受け入れた海外からの授業参観は以下の通りである。

- 6月21日 タイ ブラパ大学 約25名 APEC 関係
- 6月26日 北京市立の学校長・教育委員会 約10名 CRICED 関係
- 10月18日 パプアニューギニア 約10名 (含・教育省局長8名)
- 1月23日 韓国 慶熙大学 大学生と教員 30名

この他、11月16日より1週間、シンガポールの大学院生を受け入れた。ALT と共に英語の授業に加わる他、理科の授業参観などを行った。

又、コンピュータ関係の世界的大会で、本校生徒が大学生にも負けない優秀な成績を残したことで、審査にあたったサウジアラビアの先生が来校し、全校集会で英語でお話していただく機会もあった。

⑤北京私立汇佳(ホイジア)学校を視察

北京私立汇佳学校からの修学旅行生の来校は今年なかったが、3月に副校長と教員1名で中国の視察に訪れた。例年の受け入れでは見ることでできない学校全体の様子を見て、各施設や生徒の寮などを知ることができた。今後ホイジアに限らず、中国の学校との交流を図っていくことが視野に入れられた。

(文責：久保野りえ)

アジア諸国との交流推進とグローバル人材の育成

本校の国際教育推進事業は、2006年度にシンガポールのホワチョン校との交流が始まったところから本格化した。まずは「アジア青少年リーダーズサミット（現 APYLS）」への生徒派遣が始まりであったが、初年度より両校生徒の短期交換留学が実現し、いまでは私的レベルの交流も含め、毎年多くの生徒や教員が行き来している。2009年度からは中国北京市との交流が始まり、日中国交回復40周年の今年度は、困難な社会情勢の中で多くの高校生の交流が実現したことは大きな成果であった。

これらは従来から行われている事業であるが、本年度は「グローバル化に資する事業」が予算化され、新たな事業にも取り組んだ。特に、海外で活躍する卒業生による講演会は非常に興味深い内容で、今後に大きな可能性を感じさせるものであった。

I. 国際教育推進事業として推進しているもの

1. アジア太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）への派遣

6回目となるアジア太平洋青少年リーダーズサミットは、アジアをはじめとする環太平洋諸国の次代を担う高校生が交流するプログラムである。12ヵ国22校から80名の高校生が参加し、本校は麻布高校、下関西高校とともに第1回から日本代表として参加している。

約10日間、寮生活を共にしながら、シンガポールの政府やトップ企業等の訪問、最先端の研究に触れる機会もある。自国の政治や経済、環境問題等について発表・議論したり、各国の文化を紹介する機会もある。自国を理解し、リーダーとしての自覚を促し、国際的なネットワークを築きあげるのに非常に良い機会となっている。過去の参加者の中には、高校卒業後、海外の大学に留学する者もあり、国際的な視野を広げる貴重な機会となっている。

本年度の概要は次のとおりである。

【主催】ホワチョン校（HWA CHONG INSTITUTION）・シンガポール

【期日】2012年7月16日～7月24日（8泊9日）

【参加国（参加校数）】オーストラリア(1)、中国(3)、インド(2)、日本(3)、マレーシア(2)、オマーン(2)、フィリピン(1)、サウジアラビア(1)、シンガポール(2)、韓国(1)、イギリス(2)、アメリカ(2)

【本校からの参加】2年生3名（山下鈴乃、和田大夢、多田誠之郎）、
引率教員1名（速水高志＝情報科）

派遣生徒3名枠に対して、エントリーした生徒は25名（男子11名、女子14名）。選考にあたり、英語スピーチは筑波大学の竹谷悦子先生に、日本語による面接は附属学校教育長の東照雄先生にご協力いただいた。



Closing Ceremony で日本チームがプレゼンで表彰されたところ

2. ホワチョン校との短期相互留学

ホワチョン校との間での短期相互留学事業を2006年度より毎年実施している。

1) 受け入れ

【期 日】2012年11月13日～11月24日（11泊12日）

【受入数】生徒7名（男子3名、女子4名）、引率教員1名

【主な活動】ホームステイをしながら、学校での授業に参加する。週末はホストファミリーと過ごす。

11月23日は本校卒業生による都内研修

【受け入れ保護者のコメント】

- ・海外旅行には何度か行ったことがあるものの、外国の方と今回のように親密に関わるのは初めてだったので、大変興味深い経験となりました。共に生活することで、双方の文化、観念をより一層深く知り、理解することができる点で、ホストファミリーという形は大変良いと思います。（中略）最後の方は大変打ち解けて接することができました。家族全員が異文化に触れることができ、また自分たちも日本を紹介することで、多くの楽しみを味わうことができました。
- ・日本の文化に触れさせてあげたかったのですが、スケジュールの都合でそれができなかったのですが、自宅でひな人形や五月人形、鯉のぼりを飾り見せたところ、非常に興味関心を持ってくれました。今回、親子ともども貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

注) 同期間中、シンガポール教育省「教育アタッチメント」事業として、ロンドンで大学院修士課程を終えたシンガポール人の実習を受け入れた。

2) 訪 問（2011年度事業）

【期 日】2011年3月23日～4月4日（12泊13日）

【参加者】121回生（2012年度3年生）…下澤利香

122回生（2012年度2年生）…雨宮千華、田代理紗、堀志涼

123回生（2012年度1年生＝出発時点では中学3年生）…鈴木啓太、橋爪鞠実

引率教諭…大堀健吾（数学科）

【主な活動】

3月23日（金） 成田発、シンガポール着

24日（土）～25日（日） シンガポール観光

26日（月） 授業、放課後はバディの生徒とボタニックガーデン見学

27日（火） 授業、日本文化見学、言語センターの日本語授業への参加

28日（水） 全校朝礼で代表生徒挨拶、授業

29日（木） 授業、CCA（部活動）への参加

30日（金） 授業、ナショナルミュージアム、マリーナベイ観光

31日（土）～1日（日） シンガポール観光

4月2日（月） 授業

3日（火） 授業、シンガポール発

4日（水） 羽田着

注) 本年度は2013年3月27日～4月4日（11泊12日）、生徒9名（うち中学生3名）を派遣予定。

3. 中国・北京市を中心とする相互交流

第4回目となる「日中高校生交流」は、2012年が日中国交正常化40周年にあたることから、これまでの筑波大学附属高校、東京学芸大学附属高校の2校に、新たにお茶の水女子大学附属高校、都立西高校の2校を加え、4校で行われた、日中双方とも100名ずつの規模、イオン1%クラブの援助と外務省後援で実施された。

附属高校では7月に35名の中国生徒を受け入れ、日中間の問題から10月に予定された日程を12月に延期し34名の生徒と3名の教員が訪中した。

1) 受け入れ

7月12日(木)午後、北京師範大学第二附属高校6名、北京市第十二高校6名、北京市私立ホイジャー高校3名、天津市第二十高校20名、計35名の生徒と、北京市、天津市両政府の担当者および引率教員が来校した。1、2年の各クラスに分かれて通常授業に参加した後、育鳳館で行われた一年生全員との歓迎交流会では日中双方からのパフォーマンスを披露しあった。

夕方、附属高校側の参加者と一緒にバスで中国大使館に移動し、大使館で歓迎会が行われた。週末の14日(土)、15日(日)には附属高校側の各家庭に別れてホームステイし、日本の家庭生活を味わった。

2) 訪 問

12月19日(水)、北京を訪れた一行は、空港で北京市政府から花束で出迎えられた。当日は、ジェットロ北京事務所の講演を受け、翌日は北京市政府を表敬訪問した後、天安門、故宮を見学。夕刻には日本大使館で歓迎会が行われた。この歓迎会で日中双方の生徒が5ヵ月ぶりに再開した。翌21日(金)は、北京市14名、天津市20名に分かれ、14名は午前中の京劇体験の後、7月に来校したそれぞれの学校へ、20名は新幹線で天津に移動して二十高校へ、そして学校交流が行われた。学校交流の後、それぞれの交流相手の家庭でのホームステイを体験した。

【参加生徒のコメント(校内通信に掲載された、全校生徒向けのコメント)】

12月の中国ということで、氷点下が当たり前というような非常に寒い天候でしたが、参加者たちは発展めざましい中国の文化や歴史など、多くのことを実際“自分たちの目で”見て学ぶことができました。高校生のうちにこのような体験ができ、非常にいい経験になったなと思っています。

本校は国際交流プログラムが盛んなので、皆さんも興味があったらぜひ国際交流プログラムに参加してみてください。



12月20日(木)、北京市政府表敬訪問。挨拶する本校とお茶大附属高校の生徒。

II. 本年度新たに実施したグローバル化に資する事業

1) 卒業生による講演会

2012年9月8日(土)～9日(日)、第56回桐陰祭が本校で開かれた。学校中が「お祭り」気分で盛り上がっている中、両日とも14:00から約2時間にわたり、「卒業生が語るーグローバル社会で学ぶこと、働くこと」が開かれた。

これは、海外留学や海外勤務の経験をもつ卒業生が、これからのグローバル社会における若者の生き方について語るというもので、「グローバル化に資する事業」として今回初めて企画された。

3名の若手卒業生の講演は大変示唆に富むもので、参加した生徒は一様に「聞きに来てよかった」「またやってほしい」と述べていた。今後が期待される事業である。

登壇した卒業生と講演概要は次のとおりである。



会場の物理講義室には、高校生だけでなく、文化祭で来校した保護者や卒業生の姿が多くみられた。

◆天野友道氏 (116回生 ポート部 OB)

高校2年次(2006年)に、シンガポールのホワチョン校で開催された「アジア青少年リーダーズサミット」の第1回大会に日本代表として参加し、「カオスの世界の魅力」に惹きつけられ、高校卒業後、米国ハーバード大学へ。今年の5月に卒業し、9月からはスタンフォード大学大学院で経済学を専攻する。アメリカの大学で学ぶための準備や手続き、入学後の生活や大学の授業の様子、“志”を高く持つ多国籍の寮仲間とのふれあいなどを紹介しながら、研究者として歩もうとする意気込みを語った。

◆椎橋徹夫氏 (110回生 バレー部 OB)

バレーボール部主将として過ごした高校時代を終え、米国テキサス大学へ留学。物理学と数学を専攻するが、プラクティカルな世界の前線での経験を求めて、2007年にボストンコンサルティング・グループ(BCG)に入社。東京、ワシントンDCオフィスに勤務し、現在は中国・広州に長期出張中。「ノブレス・オブリージュ(noblesse oblige)」と「エリート(elite)」という言葉を通して、社会的責任を自覚した真の意味でのエリートを目指していきたいという志を語った。

◆寄田浩平氏 (103回生 サッカー部 OB)

高校時代はサッカーに没頭し、生涯の友人と多くの経験を得る。早稲田大学理工学部、同修士課程修了後、2005年より米国シカゴ大学、フェルミ国立加速器研究所に勤務し、国際的な研究プロジェクトに参画。2008年より早稲田大先進理工学部物理学科准教授となる。いまではCERN(ヨーロッパ合同原子核研究機構)の一員として、スイスとフランスの国境にあるLHCと、東京、シカゴを行き来する生活を送っている。「狭い世界を飛び出して、異なる視点を持つこと」の重要性を語った。

2) シンガポールの教育についての講演会

2012年度の1年生(123回生)は、2年次秋の修学旅行でシンガポールを訪れる。ホワチョン校と

の交流を一つの柱として、現在準備を進めている。

1月29日（火）6限目のホームルームの時間、第1学年全員を対象に、シム・チュン・キャット氏（Dr. Sim Choon Kiat）からシンガポールの教育についてご講演いただくことになった。ホワチョン校の卒業生であるシム氏は、卒業後は東京大学へ留学、同大学院教育学研究科博士課程を修了し教育学博士を取得され、いまでは日本学術振興会の外国人特別研究員として研究活動을続けながら、日本の各大学で非常勤講師として教壇に立つ方である。

この講演会は修学旅行の事前学習であるとともに、グローバル化に資する事業としても位置付けられる。その成果に期待したい。

3) 韓国ハナ高校への視察と国際学術シンポジウムへの参加

かねてより本校との交流を打診していた韓国のハナ高校に、妻木貴雄副校長、江原一浩教諭、西祐貴子教諭の3名が訪問した。8月28日（火）は台風15号の影響でソウル市内の学校は休校だったが、ハナ高校は全寮制のため授業を実施。風雨の強い中の訪問であった。

ソウル最初の政府からの支援を受けていない私立高校で、企業からの寄付と生徒からの学費で運営される同校は、2010年3月開校で、本年度はじめて卒業生が出るという新しい学校である。男女共学の全寮制。生徒数は約600名。

8月に青少年国際シンポジウムを実施している。中国、香港、シンガポール、タイ、韓国、スイスからの12校に加え、日本からも海陽学園（愛知県）、灘高校（兵庫県）、鷗友学園女子高校・早稲田高校（東京）が参加している。本校の参加も強く要請され、2013（平成25）年度より参加する。

4) 教職員のための英語セミナー

英語科以外の教師が英語での発信力を磨くためのセミナーを実施する。受講者は、自校紹介と自己紹介を英語でプレゼンテーションするという、問題解決型のセミナーである。アジア太平洋青少年リーダーズサミット等の海外研修の引率での応用なども視野に入れている。

実施日程は以下のとおり。各回約2時間で、希望者は全4回中、2回の受講が求められる。

2月8日（金）、2月22日（金）、2月28日（木）、3月7日（木）。いずれも16時開始。

III. その他

1) 授業参観等

独立行政法人国際交流基金の文化協力プログラムとして、2012年2月21日（火）にトリニダード・トバゴ共和国の柔道協会代表およびコーチ、スポーツ省行政官の計3名が通訳と共に来校し、5限目の体育実技「柔道」の授業を参観、学校教育における柔道について意見交換した（2011年度事業）。

また2012年12月3日（月）には、前日の「2012オリンピック教育国際セミナー」の講師としてギリシアから来日していたIOA講師のパラスケヴィ女史（Dr. Paraskevi Lioumpi）が6限目の体育理論の授業を参観、高校の指導現場におけるオリンピック教育について意見交換した。

2) 第9回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの派遣準備

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）の事業として初参加したのが2011年の北京大会のこと。2012年のオリンピックイヤーは、同フォーラムにとっては中間年であったが、クーベルタン委員会から正式なオファーをいただき、2013年8月にノルウェーのリレハンメルで開かれる第9回大会への参加者を選考、準備を開始した。今回もオブザーバースクールとして、2名の生徒と1名の教員が参加する。

（文責：中塚義実）

中高6年を通じた国際教育

1. 本校の国際教育の概要

本校は、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)校に指定されており、SSH校としての特徴を生かした国際教育を実践している。SSHなので、第一義的には理科・数学科が中心なのだが、全教科で取り組むことにより、文系の生徒にも益するところがあるよう心がけてきた。しかし、今年度は一歩進んで、SSHとは別に文系生徒を対象とするプログラム（釜山国際高校との交流）や中学生対象のプログラムも開発した。目標は、中高6年を通じて「トップリーダー形成の一助として国際感覚を涵養するためのプログラム開発・研究を行い、将来国際貢献できる人材の育成を図る」ことである。



日本民藝館にて：釜山国際高校の生徒とともに、交流の始まり

2. 平成24年度の活動報告

国際教育といっても、国内で行うものと海外で行うものとがある。まず、国内のものを挙げ、次に海外での実践を述べる。さらに、相互交流の実践、最後に教師の国際交流体験を概説する。

2.1. 国内での交流

2.1.1 筑波大学教員研修留学生との交流

7年ほど前から、筑波大学の研修留学生を本校の音楽祭や文化祭に招待したり、教育研究会に参加してもらったりして交流を続けている。今年度は、音楽祭に4名、また文化祭には10名が来校した。また、昨年度は英語の授業参観をしてもらい、その後、教授法などについて意見交換をした。今後は、文化祭など見てもらってから、もう1度学校訪問をもらい、それについて生徒と意見交換をしたり、それぞれのお国の学校行事について語ってもらったりすると、より深い交流ができるのではないかと考えている。

2.1.2 ジャパン・リターン・プログラム(JRP)による外交官との交流会 (11.10)

JRPは「日本語・日本文化力による社会貢献活動」を行っている非営利団体で、海外外交官に対して日本語ブラッシュアップなどを実施している。

その日本語を学習している外交官が本校を訪れ、日本語による自国紹介をし、併せて、生徒と小グループに分かれて交流を行うもので、すでに8年の歴史がある。日本語使用なので、中学1年生から参加することができ、実際に昨年度は、中学生が60人近く参加した。今年度は日程の関係で高校生中心に30名程の参加であったが、外交官が6名（アフガニスタン・エクアドル・グルジア・セルビア・大韓民国・リトアニア）参加してくださり、自国紹介の後、小グループに分かれ交流討論をし、最後にそれぞれのグループから報告をした。



外交官とのディスカッション

2.1.3 授業の一環としてのプログラム

本校では、総合学習として中3であるテーマについて小人数で研究する「テーマ学習」、高2ではそれをさらに深めた「ゼミナール」が開講されている。その中で、英語科では外国人研究者を招き主に科学的なテーマで講義してもらった「サイエンス・ダイアログ」を行っている。

また、専門のプレゼンテーション・コーチを招き、希望者対象にプレゼン講習を実施している。1学期は主に高校生を対象に、2学期は台中一中で研究発表をする生徒を対象に、そして3学期は中学生を対象に基礎講座を開く予定である。プレゼンに必要なジェスチャーの有効な使い方、ボイス・コントロールなどだけでなく、パワーポイントの効果的な提示の仕方、説明との連動など非常に細かい点までコーチしてもらっており、生徒ばかりでなく英語科の教員にとっても有益な研修になっている。

2.2 海外での交流

初めに述べたように、本来SSHの一環として国際交流が始まったが、現在では企業支援のもとに行っているもの、本校独自で新たに立ち上げたものなどもある。実施した順に紹介する。

2.2.1 東芝「地球未来会議」への参加（8.01～09）

東芝国際交流財団が5年前から行っているもので、昨年度に続き、今年度もタイで開催された。前半3日間はバンコクから北東200キロのチョクチャイ農場、後半3日はバンコク郊外のチュラボーン研究所に滞在。2つの対照的な環境を体験し、日本・タイ・米国・ポーランド各2校4名ずつの生徒とその引率教員が、環境問題やそれぞれの国の文化について話し合い、交流を深めた。本校からは高1・高2の2名が参加、英語によるコミュニケーションに自信をつけると同時に、その限界も感じ課題も見つけた点で有益なプログラムであり、引率した教員にとっても貴重な体験となった。



円陣を組んで語り合う

2.2.2 コア SSH 校との提携による生徒の海外派遣

本校は立命館高校、小石川中等教育学校、横浜サイエンスフロンティア高校(以下、ysfh)のコア SSH 校と提携を結んでおり、それぞれの学校のプログラムに参加をした。

①立命館コア SSH

本校からは高1・高2の計2名の生徒が参加。段階を踏んでプレゼン技術を身につけさせた上で11月の最終発表まで導き、それを検証するプログラム。

- ・英語の発音指導・プレゼン指導（6月・7月に1回ずつ）
- ・韓国サイエンスアカデミー(KSA)の生徒と実験交流・台湾・高雄などで海外発表経験（7月末）
- ・ジャパン・スーパー・サイエンス・フェスタ(JSSF)での研究発表（11/10～11/12）

②小石川コア SSH

本校からは高1・3名、高2・1名が参加。立命館と同様、段階を踏むプログラム。

- ・サイエンス・イマージョン（7/30～8/03）・オーストラリア理数系授業体験（8/06～8/19）
- ・SSH 生徒成果研究発表会（10/17）・SSH 東京都指定校合同発表会（12/23）

③ysfh コア SSH

国内の発表と国外の発表の2つがある。前者には5名、後者には2名が参加。

- ・ysf FIRST 2012 研究発表（英語口頭・ポスター発表）（9/22）
- ・米国トーマス・ジェファーソン高校サイエンス研修（英語発表・博物館見学）（1/07～1/12）

2.2.3 SSH 関連～国立台中第一高級中学（台中一中）との生徒研究交流会（12.11～16）

本校の SSH 関連の国際交流としては最大のものであり、今年で5年目を迎える。今年度も16名の生徒（高1・4名、高2・12名）を台中一中（日本の高等学校に相当）に派遣し、高1は学校紹介、高2は理数を中心とした研究発表を行った。6日間の台湾訪問の内2日間を台中一中での交流に充て、1日目は理科(化学・生物)の授業への参加や学校紹介を行った。2日目には研究発表会を実施し、台中一中生徒による司会のもと、筑駒から8報、台中一中から5報の研究発表と質疑応答が英語で行われた。発表分野は、物理・化学・生物・数学が中心であるが、天文学や都市の洪水対策、言語による比喻表現の比較などもあり、文系的内容も含んだ多彩な内容であった。

生徒の交流は研究発表にとどまらず、昼休みを利用してバスケットボールやテニスなどのスポーツ

で汗を流したほか、研究発表終了後に、台中一中の生徒が本校の生徒を連れて台中の夜市を案内してくれるなどの暖かい歓待を受け、大いに深まったと言える。翌年5月には台中一中の本校訪問が予定されており、さらなる交流の発展が期待される。



昼休み、バスケットボールに興じる



発表後、緊張の質疑応答

2.3 韓国・釜山国際高校との相互訪問交流（1.16）

本校はSSH校として上述のように台中一中との研究文化交流を続けているが、これは主に理数系に興味のある生徒中心のプログラムである。本年は、筑波大学から「附属学校のグローバル化に資する事業」として「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」として予算をいただき、その一部を文系に興味のある生徒のためのプログラム開発に充てた。幸い、以前から釜山国際高校が本校との交流を希望しており、1月には釜山国際高生が本校を訪問、3月には本校生徒が釜山国際高校を訪問するという相互訪問が実現することとなった。

1月16日、7名の釜山国際高生が本校にやってきた。本校からは派遣予定の10名と一般生徒から募った4名の計14名が、バディとして午前と午後で分担して対応することにした。午前中はまず、9時から歓迎セレモニー、お互いの自己紹介、自治会生徒による本校の学校紹介をした。10時から日本民藝館訪問。ここは日本の統治時代においても朝鮮の文化を高く評価していた柳宗悦の創設した博物館であり、交流の出発点にふさわしい場所ということで設定をした。その後、東大駒場キャンパス訪問及び昼食。昼休みには生徒集会にて全校生徒に釜山国際高生を紹介した。

午後の5、6校時の高1の国語と英語の授業に釜山国際高生を半分に分け、それぞれ参加してもらった。国語では、芭蕉の「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の句を班ごとに英訳し、そのイメージを絵にかいて比較をする。担当の国語教師は終始英語で指示、釜山国際高生の入っている班の生徒もコミュニケーション手段は英語であった。最後に、韓国の短詩である「時調」の作品を披露してもらった。また、英語の授業でも生徒が英語劇を演じたり、日韓の文化の違いをモチーフにしたクイズ・ショーを行うなど、まさに文化交流にふさわしい授業展開であった。

放課後は希望者を対象に、釜山国際校生による学校紹介。また、その後本校生徒による校内案内、部



「時調」を披露してもらう

活参観。最後は、本校生徒が渋谷まで案内をし、歓迎夕食会をして交流を終えた。第1回としては非常に内容の濃い文化交流ができ、3月の訪問が今から楽しみである。

3月の釜山訪問の予定を記しておこう。

期日は3月24日～28日。本校生徒10名（高1・5名、高2・5名）引率教員3名。

以下の日程で行う予定：

3/24(日) 14:05 成田発 16:15 釜山着

夕刻 ホテルチェック・イン

3/25(月) 釜山国際高校訪問第1日（授業参観、お互いの学校紹介を中心に）

3/26(火) 釜山国際高校訪問第2日（お互いの文化・社会について）

3/27(水) 釜山市郊外（慶州）フィールドワーク

3/28(木) 10:50 釜山発 12:55 成田着

2.4 教師の国際交流体験

本校では、上記のようなさまざまな交流プログラムの引率などを通じて教師も国際的な見聞を広めようと努力をしている。

また、それとは別に、ACCU（ユネスコアジア文化センター）を通じて、中国政府と国連大学が日本の初等・中等教職員を中国に招聘するプログラムがあり、これは中国の教育制度や課題への理解を深め、成果を学校や地域に還元することを目的としている。今年度は本校国語科の教師が参加し、北京および内モンゴル自治区フフホト市の教育部や小・中学校を訪問・見学した。ACCUのプログラムでは、これまでも米国、韓国などに派遣されており、これもまた教師の国際交流体験に役立っている。



各国首都の説明を受ける

3. おわりに

筆者が国際交流を担当してきたこの2年間でも、随分と交流の輪が広がったと実感している。現在は、派遣されっぱなしでなく、帰国後、同学年や下級生に対して自分の体験を語ったり、実際に発表してきた内容を英語で再現したりして紹介する「追体験講座」も開いている。これにより、実際派遣されていない生徒も間接的に刺激を受けることになる。また、交流プログラムのない中学生なども、高校の先輩が英語で発表する姿を見て、高校生になってからの目標を定めることもできる。

事実、今年の高校1年生に海外プログラムへの応募者が例年になく多いのも、中学の時に受けた刺激のおかげという側面がある。これこそ、本校の中高6年を通じた国際教育と言えよう。

今年度は相互交流も始まり、さらなる可能性が広がったと感じている。

（文責：八宮孝夫）

総合学科らしい多角的な国際教育の実現を目指して

1. 本校の国際教育の特徴

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では、本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」をはじめ、海外校との交流、トヨタ財団「アジア隣人プログラム」への参加、ユネスコスクールへの加盟などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら、次の3つを国際教育の基本コンセプトとして国際教育を推進している。

①「3F」で終わらない、深みのある国際教育を：Fashion, Food, Festival をネタにして盛り上がるだけの「その場限りの交流会」にとどまらず、「知る」から「考える」へ、そして「行動する」へとつながる活動にしたい。

②本校の、あるいは総合学科の特長を活かした国際教育を：総合学科高校だからこそ持ちうる農業・工業・家庭・福祉・商業などのいわゆる専門教科の知見を活かし、各教科の教員が連携しながら多面的に進める活動を実践していきたい。

③一部の教員だけに関わるのではない、たくさんの先生方が関わる国際教育を：特定の教員のみが進めるのではなく、教科の枠を超えて、より多くの教員が主体的に関わる国際教育を展開していきたい。



高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸 プレゼンテーション・セッションの様子

2. 活動の具体的な内容

2.1. 「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」

平成20年度より実施しているこのプログラムは、3年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20年度から23年度までの4年間で計22名の生徒がこのプログラムに応募し、うち7名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきた。

24年度においては2年次生を対象に募集した結果、7名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

生徒	卒業研究のテーマ	応募理由
A	養蜂を利用したインドネシアでの森林保全活動	森林伐採による災害を防ぐために養蜂を通して森林を保全するとともに、蜂蜜の販売による経済効果をもたらしたい
B	自動車大国ドイツが掲げる「電気自動車世界トップ」という目標	電気自動車の生産においては日本やアメリカに後れを取っているドイツが掲げる目標について、その実現可能性および開発状況について調査したい
C	われわれ日本人が学ぶべきフィリピン精神	自殺率が非常に低いフィリピンの人々の生活様式や考え方を調査し、日本人がフィリピンから学ぶべきことを明らかにしたい
D	日本のアニメ作品が海外に及ぼす経済効果	ここ数年でアニメ産業が急速に発展している台湾において、アニメ作品が台湾の経済にどのような効果をもたらしているかを明らかにしたい
E	日本と世界の幼児教育	福祉や教育に力を入れているデンマークにおいて、「森の幼稚園」や「統合保育園」などを訪れ、日本の幼児教育との違いを調査したい
F	外国における語学教育	英語を母国語としない国の語学教育の実際を調査し、6年間英語を学んでも英語を話すことができない人が多い日本の英語教育の改善の提案をしたい
G	オニヒトデの大量発生	オニヒトデの最初の大量発生が起こったオーストラリアのグレートバリアリーフで実態の調査をするとともに、現地の関係者にインタビューを行いたい

書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、「海外への渡航が卒業研究の深化にどれだけ効果的か」などの観点から生徒C・Fの2名を支援対象とすることに決定したが、生徒Cは1月に渡航予定だったものの出発直前に体調不良となり、実際には生徒Fのみが2月にドイツに渡航し、現地の学校を数校訪問し調査活動を行った。なお、生徒Fの活動については本校で開催する総合学科研究大会において、生徒F本人が発表した。



生徒Fの活動の様子

2.2. トヨタ財団「アジア隣人プログラム」への参加

平成22年度から24年度にかけ、トヨタ財団「アジア隣人プログラム」の助成を受けて「インドネシアと日本の高校生の協働による、地域のゴミ問題の解決方法の提案と実践～学校が核となった地域コミュニティの創造と高校生が発信する3R活動とESD～」(ESDとはEducation for Sustainable Development、持続発展教育のこと)という主題で2年間活動を行った。この活動では、計3回ずつの相互訪問およびインターネットを利用した交流を通し、本校生徒と姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校（インドネシア）の生徒が協働してそれぞれの国のゴミ問題について調査し、お

互いに話し合いながら解決方法の提案を「Kira-kira 3R」という冊子にまとめた。また本校の文化祭ではプログラムに参加する生徒とコルニタ高の生徒と一緒にインドネシア・ショップを開き、活動内容を紹介しながらインドネシアの商品の販売を行い、本校生徒だけでなく校外からの来校者にもゴミ問題のことやインドネシアの魅力などについて知ってもらうことができた。



学校の田んぼで一緒に稲刈り



文化祭のインドネシア・ショップ

2.3. ユネスコスクール（ASPnet）への加盟

ユネスコスクールとは、「そのグローバルなネットワークを活用し、世界中の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指して」（ユネスコスクール公式ウェブサイトより）いる世界的学校間ネットワークで、本校は平成23年1月に正式に加盟が認められた。現在は本校教員が全国大会や研修会に参加して情報収集をしたり、生徒が「高校生の高校生による ESD 世界フォーラム」に準備委員として参加するなどの活動を行っているが、今後は国内外計約9,000の学校を有するネットワークを生かし、海外校を含め他校と協力しながら様々な切り口で ESD に取り組んでいきたい。

2.4. 「高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸&つくば2012」の開催

平成24年度の筑波大学附属学校改革事業の一環として、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、4ヶ国5校の生徒・教員を招待し、本校の生徒・教員とともに持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは各校の生徒による環境問題の改善に向けたプレゼンテーションやディスカッションとともに、本校生徒による日本文化紹介、海外生徒による各国の文化紹介も行い、生徒同士の相互交流を深めることができた。また海外生徒は本校生徒の家庭に3泊4日のホームステイをし、校外でも異文化理解を深めた。



国際農学 ESD シンポジウムでの生徒発表

なお、このシンポジウムは筑波大学農林技術センターが主催する「国際農学 ESD シンポジウム2012」（於：筑波大学つくばキャンパス）に時期をあわせて開催した。これは本シンポジウムの参加生徒が大学のシンポジウムにも参加できるようにするために、生徒たちは実際に大学のシンポジウムのプログラムの一部としてプレゼンテーションやポスター発表を行い、国内・海外の専門家の人々とも意見交換を行うことができた。

2.5. 教科「国際」の実践

本校では平成23年度入学生の教育課程より、学校設定教科「国際科」を設置し、本校の国際教育の核を担うべく下記の4科目を設けている。24年度には2年次科目の2つがスタートし、25年度には3年次科目も合わせ4科目すべての実践が始まる。

- ・ Discussion & Debate (2年次選択)：日本語および英語を用い、世界の諸相について議論・討論するために必要な基礎能力を養う。
- ・ 国際社会 (2年次選択)：日本 (人・文化) について認識を深め、次に世界の各地域の人々・文化、日本とのつながりへの意識を高め、地球的課題に対し考察・行動するための素地を養う。
- ・ 比較文化論 (3年次選択)：世界の文化を広く扱い、文化の多様性に対応する素地を養う。
- ・ Global Studies (3年次選択)：南北問題・多文化共生・国際協力などについて見識を深めるとともに、国際的問題に主体的に関わる姿勢を身につける。



「国際社会」の授業でオランダに留学していた先輩の話聞く2年次生

2.6. その他の国際教育活動

- ・ アジア高校生による聞き書きプログラム：2年次選択科目「環境調査」受講者がインドネシアに渡航し、本校生徒は日本で、コルニタ高校生はインドネシアで行った聞き書き（農業や林業、工芸などの名人職人の方にお話を伺い記録する活動）の合同報告会を行った。



聞き書きプログラムメンバーの生徒たち

- ・ 新しい校外学習の実施：2年次生対象の海外への校外学習の渡航先を、従来の160名全員が1か所に行くという形から、25年度にはオーストラリア・インドネシア・台湾の3ヶ所に分かれて実施する計画を進めている。グループの規模を小さくして生徒一人一人の活動への関わりを深めながら海外の交流校との協働学習活動を実現することが狙い。
- ・ 留学生や海外からの訪問の受け入れ：24年度から25年度にかけてスイスの高校生を1名留学生として受け入れている。また海外の生徒や教員、政府関係者等の訪問も随時積極的に受け入れている。
- ・ 本校生徒の留学の推進：23年度から留学していた生徒2名が24年夏に帰国、広報紙にコメントを書いてももらったり、後輩の授業で話してもらうなど協力してもらっている。現在2名がインドネシアに、1名がアメリカに、1名がニュージーランドに留学中である。留学希望者の増加に対応するため、担任教員向けの留学対応ガイドブックも作成中である。
- ・ 国際教育活動の効果の検証：附属学校教育局プロジェクト研究4「子供の国際的資質を育てる実践」(座長：石隈利紀教授)において本校で実施している海外校外学習の効果を検証中である。今後は校外学習のみならず、さまざまな国際教育活動が生徒たちにどのような変容をもたらしているのか検証を進めていきたい。

(文責：工藤 泰三)

国際交流と海外支援活動による 国際性を身に付けた人材の輩出

1. 本校の「国際教育」の特徴

本校では、日本の視覚障害者をリードする人材の育成を行ってきた。近年、スポーツ・医療・IT等、様々な分野で開発途上国への国際協力活動に従事したり、国際機関や会議で活躍する卒業生も増えている。このような現状を踏まえ、国際性を身に付けた人材の一層の輩出を目指している。

小学部では、平成23年度から5・6年生に英語の授業が導入され、視覚に障害のある児童の実態に即した指導が行われている。高等部専攻科では、平成3年度から継続している鍼灸手技療法科への留学生受け入れに加えて、本年度は音楽科への留学生受け入れも行われた。校内における国際交流では、小学部における国際NGOワールド・ビジョン・ジャパンへの社会見学、高等部普通科国際交流部・専攻科鍼灸手技療法科英語クラブにおける外国人との交流、特定非営利活動法人 Hands On Tokyo と連携してのミニ動物園イベントの開催等を行った。海外での国際交流では、ロンドンパラリンピックに高等部普通科生徒が参加して金メダルを獲得したことを初め、日本代表選手として海外のその他の大会に参加してスポーツを通じた国際交流を図っている。

教員は、児童・生徒のこうした諸活動をサポートしたり、タイ視覚障害児の理数科基礎教育支援、インド視覚障害者の職業教育支援、ロンドンパラリンピックへの役員派遣、海外からの見学者への対応等を通じて国際性を高めている。



インドの教員・生徒に対する視覚障害のある生徒の実態に即した化学実験方法の体験・研修

2. 鍼灸手技療法科におけるインド支援活動

鍼灸手技療法科（高卒3年の鍼灸師養成課程、以下鍼灸科）では、平成25年1月から3年計画でJICA草の根支援による「インドにおける視覚障害者の職業教育支援」を行う。また、鍼灸科留学生受け入れ事業の対象国にインドを加える計画も進めている。

これらの実現に向けた環境調査・整備のため、平成21年度から教育長裁量経費・グローバル化事業による活動を行ってきた。これにより、視覚障害関係機関職員、理科教員、按摩鍼灸指導教員、学生の交流が着実に進んでいる。今年度は、インドの視覚障害理科教育担当教員2名と視覚障害学生2名を招き、①鍼灸科及び理科・数学の授業体験と指導法研修、②鍼灸科及び高等部普通科学生との交流、③視覚障害教育関連施設の視察を行った。

表 JICAプロジェクトを補う教育長裁量経費・グローバル化事業

交流 支援	教育長裁量経費・グローバル化事業		JICA プロジェクト (H25年1月～)
	本校関係者のインド訪問	インド側関係者の招聘	
環境	H21・23：現地施設等確認	H21：日本の教育システム視察	カリキュラム・教材整備
理科	H23：視覚障害理科実験デモ	H24：理科授業体験・研修	助言・情報提供
按摩	H23：日本の医療的按摩実演	※今後：指導者育成後交流	現地指導者育成
学生	※今後：鍼灸科生インド訪問	H24：授業体験・生徒交流	現地生に按摩指導

※今後の事業は、教育長裁量経費・グローバル化事業以外で実施する場合もある。

《今年度グローバル化事業の主な内容と日程》：9/26来日～10/3帰国》

- 9/26 学校長との懇談、校内見学
- 9/27 生物・数学授業体験と指導法研修
- 9/28 鍼灸科授業体験と教材見学
高等部2年生との交流
物理授業体験と指導法研修
- 9/29・30 手で見る博物館（岩手県）見学
- 10/1 物理・化学授業体験と指導法研修
- 10/2 鍼灸治療院（卒後の職業自立）見学
高等部国際交流部との交流
鍼灸科英語クラブとの交流



鶏の心臓を触察（生物）



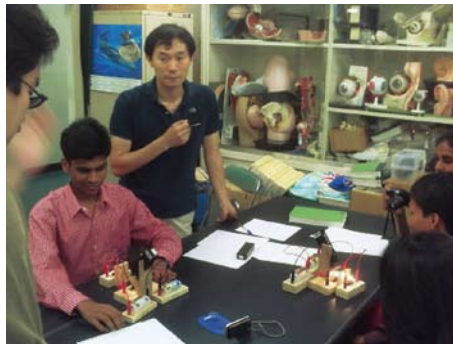
触察と目視の見え方の違いを体験（数学）



日本のあん摩を体験（鍼灸科）



英語で高2生との交流



自分で電気回路を組む（物理）



自費で博物館を建てた桜井先生（前列左から二人目）との記念写真



鯨の大きさを触って実感（手で見る博物館）



鍼灸科英語クラブとの交流



バイオリンを弾き国際交流部と交流

●インド学生の感想：ここで体験したことは、私が今まで期待すら出来なかったものばかりでした。どのようなものに関しても特別な模型等があり、わかり易く、非常に貴重な体験が出来ました。ここで学んだことをインドに還元していきたいと思います。

●インド理科教員の感想：視覚障害教育に対して、何を教えることが可能かではなく、どうしたら教えられるかを常に考えて実行に移している先生方の姿勢に感動しました。

数学の教え方は素晴らしく、全盲の生徒に見えている生徒と同じ理解を与えるためには、触察と目視による認識のし方の違いに留意しつつ、触察能力を極度に高めていくことの重要性を学びました。化学の実験では、その方法、自作の器具の安全性、視覚障害者にとっての簡便さに大変驚きました。私の学生が、酸素の発生や炭酸水の生成が自分で出来たときの喜びの表情は忘れられません。私の学校でも、すぐに理科実験を始めたいです。

（文責1：黒岩 聡）

3. 附属視覚特別支援学校 生徒・卒業生 2012ロンドンパラリンピックで大活躍!!

オリンピックの後に開催されるロンドンパラリンピックで、本校の生徒・卒業生達が大活躍をして国内のテレビ・新聞などの多くのメディアから取り上げられた。

高等部2年在籍の若杉遙は日本チーム最年少参加でゴールボールに出場し、見事に金メダルを獲得した。現役の高校生での金メダルは、初の快挙だった。



表彰式の様子



試合中の様子

ゴールボールは全員が目隠しをした3人のチームで、相手と鈴入りボールを投げ合い相手ゴールに入れるという、とてもシンプルなゲームで、視覚障害者用のスポーツである。



帰国してから学校での報告会の様子



若杉とゴールボール部顧問寺西と

若杉は入学後、高等部ゴールボール部に入部し、アテネ・北京パラリンピック出場の先輩達と日々練習をし、4回の海外遠征や月1回の国内合宿を経ての結果となった。

パラリンピックに出場するには、アジア大会で優勝すること、また世界選手権で3位以内に入賞することなど、希望して参加出来る訳ではない。2016年リオデジャネイロに向けて、戦いは始まった。卒業後も練習環境を確保したり、学校やボランティアなど、多くの支援と協力が必要になるので、応援を宜しくお願いしたい。

水泳競技では、本校卒業生3名が参加した。木村敬一(大学4年)S11クラス(全盲の部)100M平泳・銀メダル、100Mバタフライ・銅メダルを獲得。秋山里奈(大学院2年)S11クラス、100M背泳・金メダルを獲得。河合純一 S11クラス100M背泳・4位という結果だった。応援に感謝したい。



金メダル 秋山選手



銀メダル 木村選手



会場でタッピングの様子



左から河合 寺西 木村 秋山

※ 棒を持っている人をタッパーと呼び、視覚障害者の選手に壁があることを伝える。

部員達は最初からパラリンピックを目指している訳ではないが、国内で優勝したら目標をアジアへ。その後世界へと一歩ずつ前進しながら今回の結果につながった。

大会では、練習方法や環境が異なる他国の選手と会話をして、考え方や視野など広がっている。井戸の中の蛙にならず、常に前向きにと考えている。また、部の中での上下関係もしっかり出来上がっていて、先輩が後輩達に自分の経験を伝えていくといった伝統的な絆も生まれている。挨拶から始まり感謝の気持ちを持ち続ける社会性など、さまざまな経験をしながら成長している。現役の部員たちは、先輩達に続けたいと、2013年にマレーシアで開催されるアジアパラユースゲーム出場を目指して日々練習やトレーニングを続けるといった積極性も生まれてきている。スポーツを通して飛躍していく生徒達を見て、これからもサポートをし続けていきたいと思っている。（文責2：寺西真人）

4. タイ視覚障害児の理数科基礎教育支援のために交流事業を展開

附属視覚特別支援学校では、「タイ視覚障害児の理数科基礎教育に関する資質向上支援事業」を、JICA「草の根技術協力事業（地域提案型）」として2011年から3年計画で実施している。鳥山由子前本学教授がプロジェクトリーダーを務め、中学部・高等部の数学科・理科担当教諭が主要メンバーとして参加している。本事業は、タイの視覚障害児に対する理数教育の指導法の充実を目指して展開されており、タイ側の関心も非常に高く、シリントン王女からも感謝の意が伝えられている。事業の2年目に当たる本年度は、タイ国内での教員研修会を学校の長期休業中である8月と12月末に、タイのリーダー教員の日本での受入研修会が10月に行われた。

8月の第3回タイ国内の研修会は8月4日～10日の期間、実際の研修はワークショップ形式で本校から5名の教員を派遣し行われた。内容は、算数・数学の分野では「そろばんの指導」「立体図形の認識」等、理科の分野では「電気回路の実験」「細胞と細胞分裂・遺伝の指導」などがテーマとなった。

10月の受入研修では10月22日～26日の期間、タイから5名の教員を迎え、理数分野を中心とした授業見学、教材研究等を行った。物理分野では、教員手作りの波に関する実験器具についての説明を熱心に聞いたり、実際の実験を行うなど、各分野の指導のポイントや配慮事項などについて研修を深めた。

12月の第4回タイ国内の研修会は12月23日～29日の期間、8月の第3回と同様に本校から4名の教員を派遣し行われた。内容は、算数・数学の分野では「作図」「数式の読み取り」「珠算」等、理科の分野では「骨の観察」「中和滴定」等がワークショップ形式で行われ、またタイの生徒達も参加した「モデル授業」も展開された。本年度2回のタイ国内の研修は各回50名程度の研修生を迎え、熱心に受講し、参加していた。



タイの生徒を迎えて



観察実験に関する授業の様子

5. 「ミニ動物園」開催

平成21年度に発足した高等部国際交流部では、ボランティア団体である特定非営利活動法人Hands On Tokyoと連携し、毎月1回、都内在住の外国人や海外生活経験のある日本人のボランティア10名程度を学校に招き、英会話の上達と異文化理解を目的に交流会を実施している。部ではその日のために週に一度、交流会の企画や生徒がおこなうプレゼンテーションの準備をおこなっている。今回は、毎月の交流会とは別に実施された特別企画について紹介する。

Hands On Tokyoでは毎年1回、デイ・オブ・サービスという日を設定し、ボランティアが同じ日に一斉に活動をおこなうイベントを開催している。その一環として、平成24年10月20日には、本校を会場にミニ動物園が実施された。

(文責3：丹治達義)

当日は、国際交流部に加え、本校小学部の児童、都内の視覚障害者関連の学校や団体から合わせて40名程度の視覚障害児者が参加し、同数のボランティアとともに、羊・モルモット・ウサギ・チャボ等の動物に触れる体験とそれらの動物に関する英会話のレッスンがおこなわれた。動物に触れる時間には、参加者一人ずつにボランティアが付き、1時間程度じっくりと動物に触れることができた。本校児童・生徒の感想には、「自分のペースで思う存分じっくり触れてよかった」、「ウサギの毛がふわふわしていて気持ちよかった」、「もっと触っていたかった」、「またぜひやってほしい」等があり、大好評であった。

(文責4：青松利明)



動物に触っている国際交流部の生徒

6. 小学部英語授業

平成23年度より、本校でも5・6年生の英語授業が始まった。

- (1) 指導目標：①「自立活動」につながる「本物の通じる英語」の習得、
②言語の背景にある国内外の文化、生活習慣（マナー）の学習
- (2) 指導案：①教科書各レッスンの「学習目標」に準拠した授業
②各月の英米、日本の歳時記や、学校行事への言及
- (3) 実践活動：①「知的興味」を刺激する、わくわくするような活動
②弱視、盲の児童が扱いやすい教材教具の工夫

以上を基本に、日直先導の英語による授業開始と終了の挨拶のもと、児童の要望にも沿い、常に半歩先の刺激を与えつつ指導することを心がけている。有意な実践例には、点字墨字併記の1～12までの数カードを使う「ナンバー・ビンゴ」がある。ビンゴの出題は既習の「基数→序数→月の名前→その英訳和名→その由来」と、予告なしに発展させていく。児童は不意をつかれて驚きながらも楽しく「数の学習」ができる。英米の幼児が先ず学ぶ「9つの形」をチャンツで習得し、十字や五角形を加えた「形の学習」からは、5年生では「ハロウィーン・グッズの作成」、6年生では色とその意味も加えた「国旗の学習」から、「地図・道案内の学習」にまで発展させている。更に、頭音や形から「SVO」など文法用語に見立てて、並べ替えで学ぶ「文章作成装置」も、「Q&A」の助けとして人気がある。

今後も、一般校児童に負けない少しでも多くの知識（話題）を「指先と耳」から提供し、集中力が



「文章作成装置」を使っの活動



「地図・道案内の学習」の様子

あり、好奇心、向学心旺盛な本校児童の知的興味を満足させるような授業展開を目指したいと考えている。
(文責 5：股野儼子)

7. 音楽科の外国人学生について

音楽科には、ドイツ人女性が1名在籍している。本生徒は日本文化に興味を持ち、日本の大学に留学後、筑波技術大学で勉強を続けた。一方、幼少より声楽を学びたい気持ちもあり、ドイツで一度検討したものの諸事情により叶わず、本校を希望したとのことである。

本校音楽科には入試に留学生枠がないので、本生徒は日本人と共通の試験を受けて声楽専攻として入学している。本生徒は、通常の音楽科生徒としての技術や知識の習得に加え、日独両語での音楽理論の理解、さらに日本の楽器や、日本歌曲にも取り組んできた。その結果、本生徒は2年次より授業で篠笛のレッスンを受け、また定期演奏会では、日本人作曲家である武満徹の歌曲『小さな空』を披露した。

本生徒の存在は、他の生徒にも大きな影響を及ぼしており、音楽史の授業で現われるドイツの地名や言葉の意味に今まで以上に興味を持つ生徒が増えた。また本生徒も、帰国後に披露するため、ドイツ民謡『樅の木』の日本語歌詞を一生懸命覚えていた。今後、本生徒が日本での経験を帰国後生かしてくれること、そして本校とドイツとの懸け橋となってくれることを望んでやまない。

(文責 6：熊沢彩子)



篠笛のレッスン



音楽科定期演奏会にて

附属聴覚特別支援学校における国際教育推進事業

1 本校の「国際教育」の特徴

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下「本校」）は、平成20年度から教育長裁量経費、グローバル化に資する事業の支援を受け国際教育拠点事業に取り組みはじめた。事業の目的は、聴覚障害教育における指導法や教材教具の有効な活用方法を国外の教育現場に教授すること、共同研究であり、並びにパリ聾学校との相互の生徒訪問交流にも積極的に取り組んでいきたいと考えている。

2 活動の具体（国外）

（1）フランス国立パリ聾学校との国際交流教育の推進事業

- ①目 的 パリ聾学校を訪問し、交流計画の内容について具体的に協議すること。
- ②渡航日 平成25年1月10日（木）～1月15日（火）
- ③訪問先 パリ聾学校 ロダン中等教育学校 ブッフオン小学校
- ④訪問者 原島恒夫（校長） 横山知弘（高等部普通科教諭） 玉生美智子（専攻科教諭）
西俣稔子（歯科技工科教諭） 加納彩子（寄宿舎指導員）

これから実施するお互いの学校の生徒の訪問交流に向け、具体的な準備に入った。平成24年7月、パリ聾学校の教師3名が訪日し、本校で約1週間、相互訪問交流に向け具体的な準備の話し合いを持った。そして引き続き、25年1月10日から15日、本校教員5名がパリ聾学校に向かい、最終の協議を持った。現地と本校で、パリ聾学校の先生方と本校寄宿舎生徒がスカイプによる自由な交流も行った。パリ聾学校では、園芸・歯科技工・縫製・美容・木工・配管工・音楽・金属加工・グラフィック・手話の授業等を視察した。様々な職業に就けるための授業が行われているところを視察した。

なお、パリ聾学校教員とのオフィシャルミーティングでは、訪問可能時期、寄宿舎での宿泊、ホームステイ、訪問時のプログラム、費用等について議論した。



パリ聾学校のグラフィック授業



パリ聾学校教員と寄宿舎生のスカイプによる交流



パリ聾学校の音楽室



パリ聾学校校舎

楽器が載っている台は響きを感じやすくする音響板

1月11日～14日	<p>国立パリ聾学校 職業部門を中心に訪問 園芸、歯科、縫製、ヘアメイク、音楽室、木工芸、金属工、グラフィック、フランス語授業、寄宿舍、スチューデント・ライブラリー、シカールホール、メインホール、歴史資料館、事務、校長室、診療所、中学部の美術、数学の視察</p> <p>ロダン中等教育学校内支援教室 Buffon 小学校参観 (2校とも難聴児と聴児が通う学校)</p>
-----------	--

(2) 日台における聴覚障害生徒を対象とした理科教育用教材の共同開発と指導法の研究

<p>①目的 聴覚障害生徒を対象とした教材や事例を整理して、指導事例集を電子書籍としてまとめる。これにより、国際的な視点による指導資料を試作したい。</p> <p>②渡航日 平成25年1月9日(水)～1月11日(金)</p> <p>③訪問先 国立台南大学、台南大学附属啓聡学校</p> <p>④訪問者 金子俊明(中学部教諭) 久川浩太郎(高等部教諭)</p>

4年計画の1年目にあたる今年度、本校教員が台南大学の准教授のもとを訪れ、以下のような提案を行った。研究課題は、聴覚障害生徒を対象とした理科教育用教材の共同開発と指導法の研究ということで、次のような提案を行った。

- (1)理科の観察・実験に関する教材、指導事例の整理→聴覚障害生徒を対象とした教材や事例を整理して、指導事例集を電子書籍としてまとめる。これにより、国際的な視点による指導資料を試作したい。
- (2)生物・地学・環境に関する電子黒板用コンテンツの開発と評価 →日本と台湾における ICT 教材の活用状況を比較するとともに、共同で教材や指導法の検討を行いたい。
- (3)音・きこえ・補聴器に関する教材開発と評価 →本校での生徒の聴覚活用の事例も参考にしながら、教材と指導方法を模索したいと考える。



台南大学での共同研究協議



台南大學附属啓聡学校

(3) APCD 第11回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議にて発表

- ①目 的 APCD2012（第11回アジア太平洋地域聴覚障害問題会議）に参加し、聴覚障害教育に関わる研究や実践を国外に発信する。
- ②渡航日 平成24年7月25日（水）～7月29日（日）
- ③訪問先 シンガポール グランドコブソーンウォーターフロントホテル
- ④訪問者 原島恒夫（校長） 板橋安人（主幹教諭） 岡本三郎（高等部教諭）
山本 晃（教務主任）

3人の教員がそれぞれ以下のような発表を行った。

「日本と台湾における聴覚障害児の体育担当者の指導力向上に向けた教材作成」（岡本）

「聴覚口語の聾学校における人工内耳装用児の発音・発語学習で担当者はいかなる工夫をしているのか」（板橋）

「お天気メソッド ～生活に密着したことばの指導と感性を育てる指導～」（山本）



本校教諭による口頭発表



アジア太平洋地域聴覚障害問題会議開会式

(4) シンガポール カノシアン聾学校視察

- ①目的 シンガポールの聾学校（カノシアン聾学校）を訪問し、聴覚障害教育の教育方法等の情報交換を行う。その中で本校の最先端の教育方法の紹介も行う。今後、研修・交流先として本校と連携関係を結ぶ礎となるような協議を行う。
- ②渡航日 平成24年7月26日（木）
- ③訪問先 カノシアンスクール
- ④訪問者 原島恒夫（校長） 板橋安人（主幹教諭） 岡本三郎（高等部教諭）
山本 晃（教務主任） 田万幸子（中学部教諭） 鄭 仁豪（筑波大学准教授）
他筑波大学院生 6 名



カノシアン聾学校プレゼンテーション



聴力検査室

3 今後の展開

本校内においても国際教育、国際交流の機運が高まってきた。25年度以降、国際交流や海外との共同研究をより一層進めていきたい。（文責：山本 晃）

附属大塚特別支援学校における国際教育活動報告

1. 本校の国際教育の概要

本年度、大塚特別支援学校では、知的障害特別支援学校における国際教育のあり方（目指す生徒像、ねらい等）について検討し、検討結果に基づき実践を行った。教員間で共通確認したこととして、「知的障害のある幼児・児童・生徒は、言葉によるコミュニケーションが困難な場合もあるが、経験を通してからだを使って具体的に学ぶことができ、誰とでもポジティブに楽しむ力がある」ことが挙げられる。そこで目指す生徒像を「外国の人と共に活動し、仲良く楽しむことができる」、「外国の人とのふれあいを通してスムーズに交流できる」とし、彼らの強みを活かすための題材として、ダンスや音楽などの芸術表現や、オリンピックなど生徒が興味を持ちやすい題材を用いて学習を計画した（以下の2、3に詳述）。

教員の国際交流としては、昨年度に引き続き、韓国大邱保明学校との研究交流を実施した。本年度は大邱保明学校の教師が本校を訪問し、知的障害教育における職業学習や進路学習に関する協議を行った（以下の4に詳述）。

2. 芸術表現活動を通じた国際教育の実践

(1) ボリビア・フォルクローレ・ダンスを通じたボリビア人研修生との交流

JICA のボリビア人の研修生の受け入れの機会を活用し、小学部から高等部の生徒が参加する合同朝会の授業の中で「ボリビア人の先生とダンスをしよう！」というボリビアのフォルクローレの音楽とダンスに親しみ実際にボリビアの先生が来校した時に歓迎会を行いダンスをする活動を計画した。

文京区在住のボリビア人フォルクローレダンサーに協力を得て、歓迎会の前に3回ダンスを練習する機会を設定した。

歓迎会では、生徒が「作業」の授業で作った製品をボリビア人の先生方にプレゼントし、ダンスと一緒に踊り交流した。



(2) 音楽表現を中心としたボリビアの研修生との実践交流(小学部)

6月にボリビアの先生方(研修生)を5名お迎えし、授業参観や実際の授業づくりを通して実践交流を行った。最初の週は、小学部の授業(「あつまり」「せいかつ」「おんがく」等)を参観しながら、児童の様子を観察して頂いた。特に、「せいかつ」や「おんがく」の授業では、日本の伝統芸能や文化を取り入れた授業内容を設定し、児童が自国の文化や芸術を学んで紹介しながら、他国の文化に触れ自然と交流できる機会をと考え、指導した。「せいかつ」では、『お祭りへ行こう!』のテーマで、御神輿を担いだり、和太鼓や篠笛で祭り囃子を体験したりした。また「おんがく」では、『歌おう踊ろう世界のリズム♪』の学習で、箏曲による『はじまりのうた』から始め、『♪みんなであくしゅ』などの挨拶ゲームの曲にのせて実際に握手や挨拶をして触れ合った。本校の教員が授業をして見せ、途中途中で活動に参加して頂きながら、児童の様子を把握し仲良くなる機会とした。サンバ、シャンソン、フラメンコ、ハワイアン、ブギ、ロシア民謡などの曲に合わせて、リズムを感じて歌ったり踊ったりした。特に、ラテン系のリズムはボリビアの先生方が即興的に参加するだけで豊かなリズム性が広がり、児童達もそのリズムに同調して、ますます楽しく踊ることができた。全校集会でも、ボリビアのダンスを教えて頂くことができ、音楽や民族衣装を通して南米を知ることができた。知的障害の児童は、何事も体験を通して学ぶことが大切だが、本物に触れることができ、簡単な挨拶や踊り、民族衣装、国旗などに興味を持つことができ、日常の学習の幅が広がった。

2週目には、ボリビアの先生達に実際の授業をして頂いた。参観した授業を思い出しながら、児童が楽しめる「おんがく」の授業づくりを協議しながら行った。授業づくりの過程では、「言葉の壁」に対して不安を抱かれることも多々あったが、音楽というノンバーバルコミュニケーション手段の良さを活かして、授業展開を行うことになった。「ボリビアの衣装」や「ボリビアの楽器」という具体物を通して『本物に触れ』、触れ合うことでの文化の伝承をねらいとした。いろいろな雰囲気「ボリビアの音楽」にのせて、先生方を模倣して踊ったり、衣装を触らせて頂いたりした。また、楽器の紹介では、「♪なんだろう、なんだろう…あててみよう～」と日本語で歌って紹介して頂き、一緒に声を出して歌うなど、子ども達の心に残る授業となった。表現豊かなボリビアのダンスは、顔の表情をさまざまに変化させながら、動物のまねなどを行うものもあり、まさにノンバーバルコミュニケーションの良さが活かされ、『音楽は国境を越える』ことを痛感させられた素敵な空間だった。握手をしながら別れを惜しみ、また会うことを約束した。児童にとっても教員にとっても、大変有意義で心に残る「授業」となった。



3. オリンピック教育を通じた国際教育

本年度は2013年夏に行われたロンドンオリンピックをとりあげ学習を行った。知的障害教育においてオリンピック教育を行うことは世界的にみても管見の限りなく、本校の実践は先駆的試みといえる。ロンドンオリンピックをとりあげ学習を行う中で、生徒たち（高等部）の中から、ロンドンオリンピックに出場していた選手に感動したので手紙を書いてみたいという声が上がった。本来自分の考えを伝えることが困難な子どもたちの中からそうした希望が出たことは驚きではあるが、ひたむきにスポーツに打ち込むオリンピック選手の姿は感動を呼び起こすものであり、感動は人種や障害を越えるものだといえる。教育的観点でみると、素直な気持ちで感動を伝え、感謝の気持ちを表すことは、オリンピズムの理念にも合致していると考えられる。そこで、そうした感動を伝えたいという生徒の動機を大切に、選手に手紙を書く活動から生徒の興味を広げていき、その過程で国際理解教育を行うことができないかと考えた。

授業計画では、大きく①オリンピック選手に手紙や絵をかく、②オリンピックについて学ぶ、③学んだことを大塚祭（文化祭）の舞台発表で表現する、の3段階を用意し、特に②では、直接体験を組み入れるよう配慮した。例えば、日本サッカー協会のミュージアムに行き館長にインタビューする、筑波大学出身のオリンピック選手と直接交流をする、大使館に行って外国の選手の国の文化を学ぶ等である。

生徒の中にジャマイカ出身のウサイン・ボルト選手に手紙や似顔絵をかいた生徒がいたため、ジャマイカ大使館にボルト選手に手紙を渡して頂くよう協力をお願いした経緯があったので、ジャマイカ大使館を訪問してお礼を伝え、ジャマイカの文化を学ぶ活動を計画した。大使館ではジャマイカの自然や食文化について教えていただき、外交官の方とレゲエにのってダンスを楽しむなどして交流を深めた。訪問後、生徒の中からは、「ジャマイカの料理を食べることのできるレストランに行ってみよう！」「ジャマイカに行ってワニを見てみたい！」などの声も上がった。また「ジャマイカは日本の秋田県と同じくらい大きさ」ということを教えていただいたことを覚えていて、大使館に行っていない友だちに教える生徒もいた。教室の授業だけでは得られない貴重な体験になったと感じている。



4. 韓国大邱保明学校との研究交流

本校と韓国大邱保明学校は2009年に交流締結を結んだ。本年度は7月4日～6日に大邱保明学校の教員4名が本校に来校した。大邱保明学校の教員が本校の授業と、本校の親の会が運営する就労継続支援施設「わかぎり」を視察し、進路指導と職業教育について協議を行った。

協議では、本校から、日本の知的障害教育課程、本校の作業学習、現場実習（職場実習）、進路指導、授業研究について説明をし、その後大邱保明学校で行っている作業学習と現場実習について説明があった。制度は異なるが、知的障害教育の後期中等教育において生徒の自立に向け作業学習等の学習を重視している点は共通していた。今回の協議では時間の都合で、学習における支援ツール、教材、補助具等について十分に議論を深めることができなかった。この点は今後の課題である。



(文責：本間貴子・根岸由香)

小学部・中学部・高等部全校あげての国際交流実施

1. 平成24年度の国際教育の概要

今年度、国際的視野で物事を捉えようとする姿勢と、積極的に自己発信しようとする意欲のある児童生徒の育成を目標に掲げ、国際教育の実践を高等部から小中高全校に広げることができた。

2. 活動報告

(1) 大韓民国・三育再活学校（サムヨック・リハビリテーションスクール）との2回の直接交流

平成22年2月に大韓民国・三育再活学校と3年間の交流協定を結び、その前年度より昨年度まで3年間、高等部の生徒を中心にさまざまな交流を行ってきた。

今年度は8月31日に小・中・高の代表児童生徒3名が三育再活学校を訪問し、それぞれ自分たちで用意したプログラムによる交流活動を行った。小学生は自らハングルで書いたカードや折り紙で作ったメダル、クラスで人気の日本の歌を入れたCDなどを持参して、三育再活学校の小学生とゲームを楽しんだ。英語の授業にも参加することができた。中学生はタブレット端末を駆使して自己紹介などを行った。高校生は簡単な茶道の道具でお茶をたて、和菓子と抹茶を三育の高校生に振舞い、大変喜ばれた。日本の礼儀作法に則って、正座をしてお茶を飲んでくれた生徒もいた。本校の高校生が級友たちの将来の夢を紹介すると、三育の高校生たちも自分の夢について語ってくれた。給食を皆で一緒に食べ、生徒間でメールアドレスを交換したり、写真を撮ったりもしていた。

教員間では今後の活動について話し合いがもたれ、交流協定更新について合意がなされた。

博物館を見学し、韓国の歴史や文化について学んだ後、三育再活学校の先生方との会食でも、和やかな雰囲気の中で話が弾んだ。終わりの挨拶を突然指名された小学生がハングルで立派にスピーチをし、拍手喝さいを受けたことが印象的だった。

丁度竹島問題が浮上した時期で、不安を抱えながらの訪韓だったが、温かく迎えられ、友好を深めることができた。直接人と人が会って交流することの意味を再認識する機会となった。





挨拶後、三育の生徒会長と握手



授業後、三育の小学生と



正座してお茶を飲む三育の生徒



皆と一緒に給食

帰国後、小6の児童はハングルか英語を教える先生になりたいという夢を膨らませ、中学での英語学習に意欲を持ち始めた。中2の生徒は、来年度に予定されている遠隔地授業交流で、コンピューターの画面で三育再活学校の生徒と再会することを楽しみにしている。高2の生徒は、韓国での楽しかった経験をスマイルバルーンにして世界に届け、次々とバトンのようにつながって世界中の人が笑顔で平和になればいいという願いを込めた詩を創作するなど、世界平和に目を向けるようになった。

9月、10月には各学部での報告会を行い、他の児童生徒も韓国での経験を共有し、国際的視野を広げるよい機会となった。また、11月の桐が丘祭（文化祭）では、写真を多用した展示やDVDが注目を浴び、保護者の関心も惹くことになった。

このように国際交流の体験がその場限りではなく、帰国後、本人はもちろん、周りにもよい変化を及ぼし、全校で国際交流への意識が高まりつつある。

平成25年2月14日に三育再活学校で行われた交流協定2年間更新の調印式にも、小・中の代表児童生徒が参加した。

その後、それぞれ英語の授業に参加した。中3の生徒は総合的な学習の時間に行われた「池袋に行こう」という活動について英語で紹介し、三育再活学校の生徒から、車いすでの外出事情について話を聞いた。また、韓国料理がいかに日本に浸透しているかを説明し、お互いの食文化について語り合った。小6の児童は「今までで一番楽しかった。日本に帰りたくない。」という感想を述べ、周囲を驚かせた。

平成21年3月から毎年、三育再活学校を訪問してきたことで、教師間の互いの信頼関係も回を追う度に深まり、交流活動も拡がり、継続することの成果を実感した1年となった。



(2) インターネットを用いた三育再活学校との3回の遠隔地交流授業

今年度4年目になるインターネットを用いた遠隔地交流授業は、異なる学年で年3回実施できた。

①平成24年5月18日に高等部3年生と三育再活学校高等部2、3年生の英語による遠隔地交流授業を実施した。簡単な自己紹介の後、本校の生徒が「身の回りの福祉機器の工夫」をテーマにクイズ形式で話題を提供し、三育再活学校の生徒が答えるという形で進行した。「知っている。同じものがある。」という反応と、驚きの声上がるものがあり、お互い興味深い内容だったようだ。

②10月31日に同じ要領で、今度は高等部2年生が交流授業を実施した。8月に訪問した生徒から再会の喜びを伝え、三育再活学校の生徒からも同じく8月の思い出が語られ、感慨深いものがあった。修学旅行で訪れる京都、奈良の日本文化の紹介に対して、韓国の観光地の歴史や自然などについて紹介があった。その後、Kポップやスポーツなど高校生らしい身近な話題で盛り上がった。

③平成25年3月8日には、初めて小学生同士でインターネットによる遠隔地交流授業を実施した。画面に韓国の子どもたちが映し出されるだけで小学生にとっては大きな驚きだったようで、歓声が起こった。小学部5、6年生の児童がハングルと英語を混ぜながら、懸命に自己紹介や質問の交換などを行い、交流を楽しんだ。



(3) 高等部総合的な学習の時間に筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流

平成24年10月16日に高等部生徒と筑波大学大学院教育研究科教員研修留学生との交流授業を実施した。7年前から総合的な学習の時間に取り組んでいる活動である。委員の高校生が8月27日に筑波大学を訪問し、事前の打ち合わせを行った。今年度は韓国、カンボジア、ミャンマー、ルーマニアからの留学生だったが、給食時にも各クラスに入って、各国の歴史や文化などの話をしながら、生徒と交流を行った。その後4つのグループに分かれて、「バリアフリー」、「ボランティア・社会活動」「ファッション」をテーマに、生徒が準備したパワーポイントを用いてプレゼンテーションをした後、留学生とディスカッションを行った。車いすの人は学校に行けない国があるなど、生徒にとってはショッキングな話も出てきたが、世界の中で外から日本の状況を見るよい機会となった。自分たちが当たり前と思っていることが他の国では当たり前ではないこともあるとわかり、驚いたようだった。「ファッション」については、お互いに浴衣を着たり、他国の民族衣装を着たりして、写真を撮り合い、楽しいひとときをすごした。留学生から、周到的な準備やプレゼンテーションをほめていただき、良い時間を過ごせたという感想をもらった。



(4) 中学部3年生の生徒が高円宮杯第64回全日本中学校英語弁論大会東京都代表に

小学部5、6年生や、中学部1年～高等部2年では、週1回ALTによる英語の授業が行われている。この数年はカナダ人とフィリピン人のALTと本校の英語教師がペアになり、日常英会話、テーマを設定してのディスカッションやスピーチなどを通して、児童生徒の英語でのコミュニケーションや自己表現の力を伸ばすことに力を注いでいる。子どもたちは英語を話すことに積極的に取り組み、文化祭に英語の歌や英語劇の発表もしている。

今年度、中学部の生徒が高円宮杯第64回全日本中学校英語弁論大会に出場した。10月13日に行われた東京都大会で代表5名に選ばれ、11月29日の決勝予選大会（関東地区）でもスピーチを披露した。“Human Skills”「人間の技」というタイトルで、自身の手術体験において、自分を支えてくれた周りの人たちの心の技に注目し、自分もいろいろな経験と人との交わりの中で心の技を磨き、人のために役立てたいという決意で締めくくった。11月29日から3日間、各地区決勝予選大会に全国から集まる高い志をもつ仲間たちと全日本中学生会議に参加し、さまざまな刺激を受け、今後英語で世界に自己発信することに大きな意欲を持ったようだ。

3. 今後の展開

来年度は、数年間継続している上記の活動をさらに継続、発展させたい。また、日本の漫画の英語版、外国の地理や文化を知るための地図や写真や資料、英語やハングルの絵本などを揃えた国際理解コーナーを設置し、児童生徒の国際的な視野を広げ、語学力を高める一助にしようと計画している。

(文責：山本 喜洋子)

教師の国際化にかかわる取組と交流について

I アメリカから講師を招聘して行われたTEACCH自閉症研修の実施

1 概要

本校では2名程度の教員が海外に視察や交流に出向き、その成果を他の教員と共有する実践等を積み重ねてきたが、より多くの教員が、直接、海外のプログラムや実践を学ぶ機会を設定し、全教員が国際化の視点から見識を広げることができないかと考えた。その初めての取組として、平成24年度はアメリカより講師を招聘し、TEACCH自閉症研修プログラムの中から、自閉症幼児の指導のための研修プログラム「Ready,set,go」を本校のために4日間のプログラムにアレンジしてもらい、全員が参加し、以下のようなねらいで研修をおこなうこととした。

- (1) 幼児期の自閉症の学習特性の理解を深め、一人一人に応じた学習環境の設定、アセスメントの方法、アセスメントから教材をどのように作成するかなどについて、講義や演習を通じて学ぶ。
- (2) 指導者と子どもとのやりとりの場面を観察し、子どもに合った言葉の掛け方や関わり方などの指導方法等を学ぶ。
- (3) 実習を通して、更に子どもの実態や指導内容に合った教材を作成する。
- (4) 本校で実践している1対1の指導（個別課題）や自立課題の取組、ワークシステムなどについて基礎となる理論を学び、日頃の自分の実践を振り返り、今後の指導に生かす。

2 講師

Janette Wellman, Ph.D. Clinical Director Wilmington TEACCH Center

(ウィルミントンTEACCHセンター長)

Kaia Mates Psychoeducational Therapist (教育心理士)

Betsy McCormick Psychoeducational Therapist (教育心理士)



講師の先生を囲み、作成した教材を持って記念撮影

3 日程（予定） 平成25年2月23日（土）～25日（月）

期日	研修内容
2 / 22（金）	講師：学校施設見学、子どもの様子の見学及び準備（半日）
	
子供たちと同じテーブルで給食を食べ、交流をする講師の皆さん	教材を確認し、見学した情報から本校に合わせてアレンジする講師の皆さん
2 / 23（土） 研修1日目	<ul style="list-style-type: none"> ・TEACCHと構造化した指導、幼児期における自閉症児の学習の必要性について（講義） ・学習環境の構造化（実技、演習） ・整理統合／個々の応じた視覚的なサポートについて（講義） ・グループ活動 ・スケジュール、子ども合った活動の設定とその組み立て方（講義、実技） ・質疑応答
	
いつでも質問に答える、なごやかな雰囲気で行われる講義	ビデオで見た幼児の実態に合わせて、実際に教室を構造化する実技
2 / 24（日） 研修2日目	<ul style="list-style-type: none"> ・アセスメントとグループ活動（講義と演習） ・アセスメントから子どもの活動を考える。（演習） ・具体的な指導についてのディスカッション（演習と講義） ・具体的な指導についてビデオを視聴する。（講義と演習） ・子どもに応じた教材を作成する。（講義と実技） 質疑応答



熱心なディスカッションと的確な助言をする講師の皆さん



3種類の教材作成（扉付き絵本・食べる指人形・模倣遊び用ボード）

2/25（月）
研修3日目（半日）

- ・社会性をもった人とのやりとりやコミュニケーションについて（講義）
- ・本校の幼児児童（3名）の指導の実際（演習と実技）
- ・質疑応答
- ・まとめと評価、講義の認定



本校の幼児とやりとりの個別指導



個別指導後に、その場で質疑応答とまとめ

II 中国浙江省寧波市達敏学校との姉妹校締結による交流

当初は、本校の教員が達敏学校に出掛ける交流を予定していたが、これは次年度に延期することとし、ウェブ会議や本校の授業をネット配信する取組を行った。また、交流をきっかけに中国の華東師範大学特殊教育学院より院長、副院長、教授、博士課程大学院生計8名が見学のため本校を訪れるなど、交流についての広がりもみられるようになってきている。

III 海外からのお客さまとの交流

本校では、様々の海外からのお客さまを迎えている。平成24年度もカンボジア・インドネシア・ボリビア、中国、韓国等、視察にこられた外国の方々を迎えるのに当たり、子供たちがふれ合えることをねらって、朝の職員打合せではその日に訪れるお客様の国の挨拶についてレクチャーが行われている。教員は早速、朝の会で子供たちと簡単な挨拶を練習するようにしている。そのため、子供たちは外国に興味をもち、自分からお客様に挨拶したりかかわったりする幼児・児童も見られる。

（文責：赤松 泉）

JICA ボリビア特別支援教育教員養成プロジェクトへの協力

本センターでは、昨年度から JICA（独立行政法人国際協力機構）とともに南米ボリビア国「特別支援教育教員養成プロジェクト」を開始している。本年度は、知的障害教育専門及び肢体不自由専門の研修生10名（ラパス県、コチャバンバ県、サンタクルス県）が、6月4日（月）～6月29日（金）に来日した。本センターなどでの講義の他、障害種グループに分かれて附属大塚特別支援学校（知的障害）と附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由）を主な研修場所とし、他に両校が連携している施設や公立学校、附属久里浜特別支援学校の見学が行われた。

実践的な研修を目指して3週間にわたり以下のような日程、内容で実施された。6月4日、JICA 東京国際センターにて開講式。6月5～6日、本センターでの講義（日本の特別支援教育他）。6月7～8日、大塚・桐が丘・久里浜特別支援学校見学（学校説明、授業見学）。6月25～28日、特別支援教育研究センターでの研修（授業案作成等）。6月29日 JICA 東京国際センターでの修了式。

ボリビアの研修生は、附属特別支援学校の教員が日頃の子どもの様子などを注意深く見守るなどして実態を把握し、個々の子どもに応じた指導計画を作成し、それを教員が共通理解した上でチームとして指導に当たっている様子に感銘を受けたとの感想を述べている。また、個々の障害特性に応じた教材や子どもたちの興味をひく授業展開などに関心を寄せていた。2週間に及ぶ学校での授業見学の後、特別支援教育研究センターで4日間かけて帰国後実施する授業案づくりを行った。グループごとに、実際の授業をイメージしながら、授業の展開を考えたり、教材を作成したりしながら意見交換する中で、一層特別支援教育に関する理解が深まったようであった。（文責：野村勝彦）



起震車体験（大塚特別支援学校：避難訓練）



音楽（桐が丘特別支援学校 小3）



講義：日本の特別支援教育（本センター）



修了式（JICA 東京国際センター）

3 スウェーデン王国・マルメ市特別支援教育視察報告

視察について

インクルーシブな教育の先進国と言われているスウェーデンの教育体制の概観を知るとともに、特別支援教育が行われている学校現場の実際を視察し、特別支援教育を進めて行く上での共通課題や指導における教育環境、設備、指導上の手立て、方法、教材教具、通常教育との連携等について、附属特別支援学校5校の教育研究活動の参考となる知見を得ることを目的とした。また、伝統的な北欧文化や北欧の市民社会の一端を見聞することで、教員の国際的資質涵養の一助となることを期待したい。

- ・視察日程 平成24年10月14日（日）～21日（日）
- ・視察場所 スウェーデン・スコネ県マルメ市、ルンド市他
- ・視察人員 7名

附属学校教育局	次長	石隈 利紀（視察団代表）
附属大塚特別支援学校	副校長	神田 基史
附属桐が丘特別支援学校	副校長	西垣 昌欣
附属久里浜特別支援学校	幼稚部主事	加藤 敦
附属視覚特別支援学校	小学部教諭	嶋 俊樹
附属聴覚特別支援学校	副校長	伊藤 僚幸
附属学校教育局国際教育推進委員会委員		吉沢 祥子

・視察観点等

- * 肢体不自由児童・生徒、視覚障害児童・生徒等、自閉症児童・生徒が、実際に在籍している通常の学校の教育活動の実際。
通常の学校（基礎学校）で学習している、障害を持つ児童生徒に対する支援の実際、人員設置など制度上の体制、学校環境整備状況、学習指導上の配慮等
- * 場の統合として同一敷地内に設置されていると聞いている、基礎学校、及び特殊学校の教育活動の実際。
通常学級での授業が週の時間表の半分以上を占めるという条件下での教育活動など、基礎学校と同一敷地内にある特殊学校の教育的交流の実際等
- * 基礎養護学校（知的軽度対象）、あるいは訓練養護学校（中度・重度対象）の教育活動の実際。
- * 分離教育として例外的に存在すると聞いている「重度重複障害児」の学校、及び聾学校の教育活動の実際。
重度重複障害児、盲聾重複障害児のカリキュラム等
- * 学習活動に困難を示す児童生徒へ与える、援助プログラムの実際と作成手続きについて。就学するのが適切か否かの判断、判定の基準等について。

・現地視察校等

10月15日（月）ルンド大学キャンパス、ルンド市街歴史的建造物等見学、
Östervångsskolan（聾学校）視察、
スウェーデン・マルメ市の健常児・障害児教育概要について
児童・生徒教育担当 Kerstin Wramell Lundin

10月16日（火）Munkhätteskolan（支援チームを持つ学校）視察
Safirens Resurscenter（スヌーズレン施設）視察
マルメ市旧市庁舎等歴史的建造物見学

10月17日（水）Norra Sorgenfri Gymnasium(f.d Parkskolan)（知的障害職業課程高校）視察
Skolområde autism Fäladsskolan（自閉症児対象校）視察

10月18日（木）Annebergsskolan（重度重複障害児クラスを持つ小学校）視察

10月19日（金）コペンハーゲン アマリエンボー宮殿周辺見学、人魚像、アンデルセン住居周
辺、ストロイエ等見学

●視察報告 1：Östervångsskolan(聴覚障害児専門学校)

小雨が降りしきる天候の中、スウェーデン特別支援学校最初の訪問が Östervångsskolan であった。日本には滅多にない風格と趣ある校舎が私たちを静かに迎え入れてくれた。

はじめに Richard Johansson 副校長から説明と案内を受けた。Östervångsskolan は、分離教育として聾、聴覚障害、言語障害を持つ児童生徒を対象にした、ルンド市内にある地域別特殊学校 5 校のうちの 1 校である。創立140年の歴史をもち、手話法を中心に教育を行っている。



この学校には、聴覚障害・言語障害の他に、肢体不自由・視覚障害児童生徒が在籍し、1年から10年生までの児童生徒数は55名（内就学前4名）である。22名の教員が指導を行っていた。基本的には手話を用いた教育との説明であったが、児童生徒の障害の状態等によって、聴覚を活用した教育を受けている子どももいた。補聴器装用児童生徒は20名（約3割）、人工内耳児童生徒は20名である。このような児童生徒は聴覚学習を学校以外の言語療法士から受けている。

一般の学校と同じ教科を学び、教育課程も同様とのことで、普通校と同じレベルでの教育を行っている」と強調していた。視覚障害者や身体障害者（車イス使用の子ども）には、アシスタントと呼ばれる介助員がつき授業は1階の教室を使う。聴覚障害と知的障害を有する重複障害児と心理士が認定した場合は、知的障害者用のカリキュラムで教育を行うとの説明であった。

通常、授業は公開していないということであったが、本訪問では8年から9年生（16才）8名のクラス「コミュニティー」学習の時間を参観する機会を得た。軽度難聴の教師が、生徒に最近の出来事や就労について話をしていた。このとき教師と生徒とのやりとりは、音声は一切なく、完全に手話のみでコミュニケーションを図っていた。日本の聾学校の手話を活用したやりとりに比べ、とてもゆっくりとした手話であったのが印象的であった。このクラス8名のうち5名は補聴器を装用していた。

他校生徒との交流については、他の聴覚障害児専門学校と各教科で、年に1回交流会を行うなど、



交流が盛んに行われておるようである。隣国デンマークのコペンハーゲンの学校とも2ヶ月前、マルメ市で交流会を実施したとの説明や、オーストラリアの学校ともインターネット等を使って交流しているとの報告もあった。また、通常の学校の生徒とは、スポーツを通して交流を図るという。

I T機器の教育環境についての説明は、I T関連担当教師（Maria Wahlund 先生）から聞くことができた。校内のI T機器設置状況は、①iPad 5台をレンタルし、生徒が個人的にも借りられる環境にあること。②各クラスに1から2台、コンピュータールームに9台のコンピューターを設置していることであった。また、I T関連担当教師は、I T機器の活用等を職員にレクチャーする業務も任されているようである。韓国の聾学校でもそうであったが、I Tにおける教育環境の充実ぶりには驚かされた。

児童生徒は、自宅から公共交通機関を使い通学する。通学にタクシーやバスなどを使う場合の費用は全て学校が負担するようである。金額にすると、年間200万クロネ（約2200万円）になるとのことである。スクールアワーは、8時20分から15時。その後の時間は課外活動が設定されており、28名の生徒が参加している。

在籍児童生徒の兄弟姉妹が健聴者である場合、この兄弟姉妹に春と秋それぞれ1週間、手話を学習する時間をつくるとのことである。ルンド市内3カ所（職員2名常駐）、4部屋からなる「生徒の家（ブルンスカータ）」は、聴覚障害生徒と健聴の兄弟姉妹が、宿泊しながら手話コミュニケーションを学習する際に利用されている。「生徒の家（ブルンスカータ）」にかかる費用等は学校が負担。保護者が利用する場合は無料である。

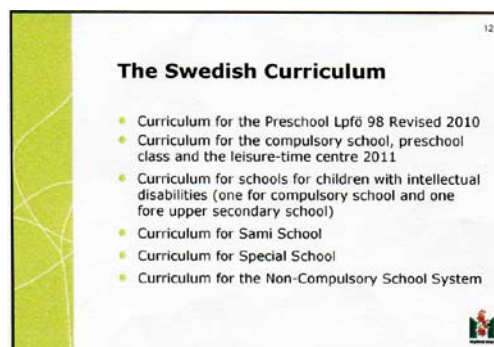
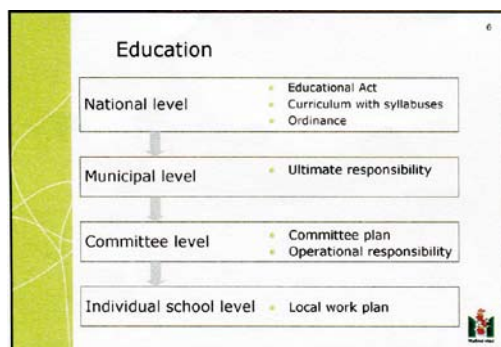
スウェーデンでは、労働人口減少の対応策として移民を積極的に受け入れている。よって、移民の子弟も在籍している。手話通訳を手配する際、出身国が異なること等も配慮しなければならないようである。また、手話通訳者は、手話通訳制度の利用の仕方とも指導しているとのことであった。

3年後、一般校と併設した場所に移転する予定であるという。現校舎が老朽化していることと、健聴児とコミュニケーションできる児童生徒（聴覚障害・言語障害児）は、話す相手がいる教育環境が大切であると言うのが移転の理由であった。（文責：伊藤僚幸）

●視察報告2：スウェーデンの健常児、障害児教育について

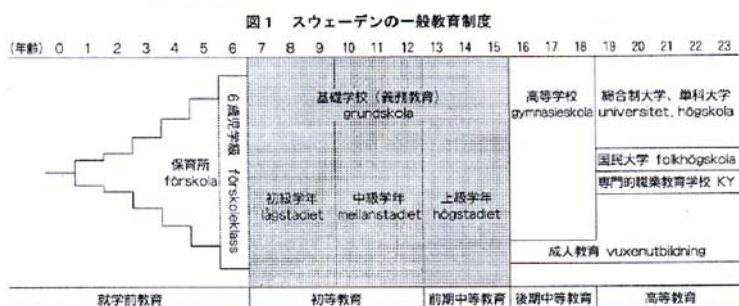
マルメ市児童・生徒教育担当官 Kerstin Wramell Lundin 氏から話を伺った。

マルメ市の大きな特徴は移民が多く、住民の年齢が若いことである。人口約30万の都市であるが、そのうち30パーセントを移民（175ヶ国から）が占める。また約48パーセントが35才以下の市民である。スウェーデンでは教育費は私立学校も含め国が負担し、大学まで無料である。（ただし、2011年



よりEU加盟国以外からの外国人は大学授業は有料)教育の枠組みは国が作り、市が独自の計画で実施することを許されている。市の教育委員会が教育計画を立て、各学校が実行するシステムである。校長は教師採用と教材選択に責任を持つ。

マルメ市ではサーメ語などのノルディック言語を除き、147ヶ国の国語が話されており、住民の多様性を鑑みて言語教育を重視をしている。外国人の社会参加のために、スウェーデン語と母国語の両方を学ばせることが、カリキュラム内、または課外授業として行われているようだ。幼稚園教師や科目別の教師が不足しており、教育学部学生が研修を兼ねて現場の教師と協同体制で指導するなど、教師がマルメ市に残るように市が努力している。教員の給与はマルメ市が支給し、幼稚園から義務教育学校、高等学校まで教員の仕事50パーセント、研究50パーセントという体制を作り、研究分野の重要性を市が十分認識していると言える。子どもは遊びと勉強を通して学ぶものであるという考えの基に学校の勉強というものを幅広く捉えている。教員同士、また教員と生徒が協力しあい、お互いを尊重することを大切にするので、生徒の意見を反映すること(生徒が自分の意見を反映出来ること)、また最終的には教師が判断するとしても、生徒の意見をどの程度反映できるかということについては教師は責任を持つ。教師と生徒の意見が違ような場合、保護者に納得させることが大切である。学校では春秋2回の個人面接を、生徒も交えて保護者に行っており、この時子どもの発達状況を詳しく保護者に説明するが、この面接では子どもも意見を言える。義務教育段階では、子どもの意見がそれほど反映されないのが課題である。就学前を含め、安心して学校に行かせる事ができる体制も整備されており、学校の始業前、始業後の学童保育(学校と同じ場所にある)、や託児ママ制度がある。学童保育対象の子どもの両親は就業者か学生に限る。就学前の1才～5才の子どもの90パーセントが、両親が何らかの保育料を払って子どもをあずけているが、保育料は1ヶ月1200クローネ(約13200円)である。収入により上限を設け、2人目からは安くなっており、4人目には無料となる。また1才～



出所：二文字理明・伊藤正純(2002)「スウェーデンにみる個性重視社会」校井書店 p.22

年齢	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	n	
程度	基礎義務学校 grundskola										一般プログラム nationella program	高等義務学校レベル								
重点	基礎義務学校 grundskola										特別課程プログラム specialiserade program	基礎義務学校レベル								
重点	基礎義務学校 grundskola										個別プログラム(IP) individuella program	基礎義務学校レベル								
学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4						
	義務			義務			義務			権利	権利			権利						
	初級学年 lästadiet			中級学年 mellanstadiet			上級学年 högstadiet			高等義務学校 gymnasieskola			知的障害者のための 成人教育 svuxenutbildning							
	義務学校 skola										義務学校 obligatoriska skola									
	義務教育としての義務学校 obligatoriska skola										義務教育としての義務学校 obligatoriska skola									

図2 スウェーデンにおける知的障害者の教育(義務学校教育制度)

4才の子どもの15時間以下の保育料は無料である。学童保育等の保育料を除く、他の教育費は無料である。

スウェーデンで言う特殊学校（Special school）とは、聾、盲、視覚障害と他の機能障害を併せ持つ児童生徒（7才～16才）用の学校であり、基本的に授業内容は義務教育の普通学校と同じであり、一部を子どもに合わせて特別のシラバスを用意している。その他にサマー人のための学校（7才～12才）、知的障害者の養護学校（7才～19才）が用意されている。



知的障害者については、その子どもが普通教育で対応できるかどうかを、国の基準に沿って教育学からの観点でのテストや、心理テスト、医学的、社会的なアセスメントに基づいて判定をする。マルメ市には知的障害者のための学校は義務教育段階で16校、高等学校が1校あるが、場の統合として同一敷地内に中庭を挟んで設置されている。休み時間は双方から子ども達が庭に出て混在して遊んでいるが、学習はそれぞれの校舎内で行われている。しかし子どもによっては、ある教科の時間は普通学級に出向いて学ぶなど、子どもの実態に即した教育が行われている。このような子どもの場合は、5年生と8年生でも判定のアセスメントを行っている。

普通教育を受けるか、知的障害の教育を受けるかの決定は基本的に親がするが、子どもの最善の利益のために、親の決定と異なる判断が出る場合もある（数は非常に少ない）。また、聴覚障害等に対しては、手話の教育が必要であるということで特殊学校で分離教育を行っているのであるが、これを除いては、スウェーデンでは学習の場の判定の基準は知的レベル（IQ70）で分けている実態がある。従って知的に問題がなければ、聴覚障害等を除きいかなる障害であれ普通学校で教育が為される。普通学級にいて、高学年になって特殊学級に変わるような場合がいじめの対象となりやすいが、高学年になるに従っていじめの指導が難しくなるのは日本と同様である。移民の子弟で不安を抱えるような場合は、学生がメンターになる“ナイチンゲール”というメンター制度のプログラムがマルメ大学に設置されている。

教師教育としては2011年に法改正がなされ、各資格を得るために、幼稚園教師が3.5年、義務教育



低学年教師4年、高学年教師4年、学童保育3年、科目別教師（義務教育7年生～9年生対象）4.5年、科目別教師（義務教育以上）5年～5.5年、職業教育担当1.4年、特殊教育担当教師がこの他に1年半の教育が必要になった。また補習教育として、特殊教育学校教師が普通学校教師を対象にした研修を行うなどで、短期間の研修を何回か受けたことで1年半の研修終了という形にする場合がある。手話法や点字については、医療機関の管轄でありそちらの講習を受ける。（この制

度は法改正が2011年に為されたばかりなので、実際はこれから。）

分離教育としての聴覚障害学校の教員については、聴覚障害者、視覚障害者向けの研修を聴覚障害教育担当者、視覚障害教育担当者から受ける。聴覚障害教育を担当する者は、普通学校の軽度難聴聴覚障害児のアセスメントもするが、補聴器についてはスコーネ県の医療関係者と連絡を取って進める。

（文責：吉沢 祥子）

●視察報告 3 : Munkhättenskolan (Team Munkhättenskolan)

最初にスコーネ県の職員であり、この学校の職員でもある Britt-Marie Rudnert さんからこの学校の支援チームについて話を伺った。この学校は、就学前～義務教育の9年生まで420名の児童生徒が在籍し、内38名が聴覚・視覚・肢体不自由などの障害がある子どもである。視覚障害と肢体不自由を併せ持つ子どもがいたが、現在は在籍していない。CVI (cerebral visual impairment) の子どもが在籍している。この子どもたちの教育については特別支援教育教師2名を含む10名の Munkhätten チームが決めている。チームは、特別支援教育教師、生活訓練（ハビリテーリング）医師、相談カウンセラー、心理士、言語療法士、作業療法士、理学療法士などで構成されている。アシスタントは主に担当する子どもが決まっており、学校にいる時は一日その子に付くが、学童保育に行く場合は別のアシスタントとなる。アシスタントは高校を卒業していることと、保育士か准看護師のどちらかの資格が必要であり、子どもにコルセットを着けてやるようなことから、日本



で言う医療的ケアの内容までやる。1例をあげると11才の子ども4名のグループに3名のアシスタントが付き、特別支援教育教師と連携しながら指導にあたっている。特別支援教育教師は各グループに関与するが、これらのアシスタントは担当する子どもが決まっていて、このグループのように1人で2名の担当をする場合もある。また、他のグループの仕事はしないので完全に分業体制である。アシスタントと教師は授業内容や、アシスタントにやってもらいたいこと等について、週1回話し合いを持つ。アシスタントは両親と教師の連絡役である。

この学校はスコーネ県のハビリテーリング（生活訓練）の管轄の学校であるので、校内にハビリテーリングの専門家チームを置いており、マルメ市在住の、CP、筋疾患、脊髄損傷、交通事故後遺症、脳腫瘍など普通学校では対応できない子ども達を対象としている。ハビリテーリングの担当者会議が1学期に1回開かれ、チームの担当者（医師、理学療法士、作業療法士、保健

担当、心理士、教師）が集まる。スウェーデンではすべての子どもに個別の指導プラン（IUP）があり、また、子どもたちは普通学校の教室でも授業を受けている場合があるので、教育目標とハビリテーリングの目標達成についてどのようにして行ったら良いかを話し合う。このミーティングには子どもも参加する。子どもや保護者に通訳が必要な場合は通訳も参加する。ハビリテーションのま



め役は子どもの担当者（担任）であり授業内容について子ども、保護者、教師を交えて話し合いを持つが、ハビリテーションでは、子どもに積極性を持たせることを重要視している。チーム Munkhätten は特別支援教育とハビリテーリングも担っている。

スコーネ県職員であり且つ学校の職員でありチームの一員でもある理学療法士のマリアンモックさんの話では、子どもの補助器具の判断や申請、補助金の手配、教員に障害児の接し方 e.t.c. について指導する、特別支援教師やアシスタント向けの、障害児に関する研修会のコーディネート、テーマ別の分科会研修、全校の児童生徒対象に（3 学年ごと）の障害理解教育などを行っているとのこと。

説明を聞いた後、2つのグループに分かれて実際の教室の様子を見せて貰った。残念ながら、子どもたちの情報管理は徹底されていて、教室内での子どもを入れた映像等の撮影は厳禁とのことだった。9 才と10才の女兒2



名の学習グループでは、アシスタントが1名付き、10



月16日という日付の確認や、自分が怖いと感ずる事柄をあげると言うような学習をしていた。この学習グループの男児1名はこの同じ時間に普通学級の方へ行って算数を学習しているとのことだった。また、女兒の内1名はごく最近、中近東の国から来たとのことである。言語に障害を持つ子にはブリスシンボルという文字と図形が組み合わさった表を代替手段としてコミュニケーションを図っていた。このブリスシンボル表は、どの学校でも使われているようである。



最後に、担当している特別支援教員の方の話を伺った。スウェーデンでは健常児、障害児を問わず全ての子どもについて担任教師がIUP（個別の指導プラン）を作成する、指導要領に沿ってチェックを行い、知識レベルに達しない子どもには対策プログラム（Atgardsprogram）を考える。このプログラム作成にチーム Munkhätten が関わること、コミュニケーションがすべての基礎と考えるので、科目の教育計画や成績基準も、話す、聞く、作る、書く、読む、を基本に置いていること、遊びを通しての学習からスタートすること、教師が子どもに持つ期待と、動機付けなどについて、子どもと保護者の協力の上で子どものニーズに合わせて優先順位を考えること、また、対話能力や、会話の手段、積極性を育て、自分のことを他人に説明する訓練などを通して、子どもに自己決定させることが重要であることなどである。また、要求が強い親には、指導計画書を見せて納得してもらうことなど、全ての活動に関わる大人が、自分の役割を十分認識していることが大事であるとのこと、洋の東西を問わず、教師が大切に考えることは同じである。（文責：吉沢 祥子）



●視察報告：4 Safirens Resurscenter

Safirens Resurscenter は、マルメ市の海岸部の高級住宅街の中に位置する重度の重複障害者向けの2階建ての施設である。ここでは、作業療法士のLone Johanssonさんから説明を受けた。この施設は1994年に発足し、重度重複障害者の体験活動やスノーズレンの施設を使った感覚訓練が行われており、ルンド大学の研究プロジェクトにも協力している。職員の構成は、作業療法士2名、介護福祉士（高校の介護課を卒業した者で、活動リーダーとなる）、個人アシスタント6名からなり、言語療法士が加わることもある。職員はフレックスタイムで勤務し、1階と2階の職員は完全分業体制で、仕事を1階と2階で兼ねることはない。また、この施設はスコーネ県（対象は1975年以降に生まれた者）とマルメ市（対象は1974年以前に生まれた者）で行われているハビリテーリング（生活訓練）の場にもなっている。ハビリテーリングには、看護師、言語療法士、理学療法士、作業療法士と各種専門家が連携している。



1階では生活訓練が行われ、視覚障害者や車イス利用の利用者が多数で、その3分の1が全盲を含む視覚障害者である。利用者は、マルメ市で認定された21才～65歳の知的レベルが2歳相当の人たちで、利用形態は登録して利用する人と予約を取って訪問してくる人とに分かれている。現在、登録者は27名で、3つのグループに分かれて生活訓練を行っている。体験活動は予約制で、利用者は1週間に約40～50名であり、その中には子どもも含まれる。1週間に何度利用するかは、個人の意欲や体力



による。利用する前にインフォメーションと研修があり、付き添い者の準備と利用者本人がこの施設を好むかどうかの事前準備がある。この施設では体験活動や訓練を通して、障害者の好奇心を刺激すること、本人に“発達したい”という意欲や気持ちを持たすこと、意欲や好奇心が日常継続するようにすることなどを目的としているが、重度の重複障害を持ち平均して知的レベルは2歳程度であるので、各個人に適応したものを用意することが大切である。コミ



ュニケーションの訓練としては、ブリスシンボルを使い、言葉だけでなく具体物を持たせて話すなど、また物だけでなく音、音楽を使う、絵やアニメでコミュニケーションを図るなど工夫がある。職員、本人、家族で話し合いを持ち、訓練プログラムを作成するが3ヶ月ごとに改訂し、1年後に訓練結果を記載報告し、プログラムを



作り直すが、適切な訓練内容を探すのが実のところ難しいとのこと。Johansson さんが1階の登録利用者のプログラムの目標をたて、その評価は家族と職員で決定した基準で判断される。現在は、ドラマ、自然に親しむこと、水を使うこと、調理、タクティル、スヌーズレンでの感覚体験など実現可能な活動が計画されている。建物内は障害者に居場所や部屋を認識させるように、通路、廊下は黄色の壁、ホールは赤などコントラストの強い色別やサインで視覚的な整備のほか、全盲者用に食堂の床の材質を違えておくなどの工夫がある。体験活動の訪問者は楽しみのために来ている。子どもについては、木曜日以外は15：30まで、木曜日は19：30までの利用が可能であるが、土曜日は隔週休み、日曜日は休みとしている。

2階のスヌーズレン施設は、“天国”、“月”、“風”、“太陽”、“芸術と音楽”、“ジャグジーバス”、“マッサージルーム”などのテーマ別に構成されており、7：00～19：00まで利用でき、利用者は1時間ほど各部屋でゆったりと過ごせる。また、タクティルスマイレニングと呼ばれるマッサージを施す時間があり、研修で認可を受けた者が、上手に人間関係を構築しながら、緊張感を取り除きながら身体各部をなでるようにして、指、腕、足などの身体部位を認識できるようにする。このタクティルのやり方は附属桐が丘特別支援学校の自立活動で行われている静的弛緩誘導法（Tachikawa Method）の手法に非常に良く似ているように思われた。（文責：嶋 俊樹）



●視察報告 5：Norra Sorgenfri Gymnasium（知的障害高等学校）

この高等学校は、知的障害の職業訓練課程を置いている高等学校である。7月に当地へ移転したばかりで8月から授業がスタートした。校長は4人いて、そのうちの3名が知的障害の学校の方を担当し、1名が普通学校を担当している。それぞれ25名ずつの教員を管轄しているとのことであるが役割の棲み分けなどは定かには分らなかった。特別支援学校の方には110名の職員がいる。



看護師と相談カウンセ

ラーが常駐している。



特別支援学校の3名の校長の内の一人である Mikael Follrad 校長より知的障害対象の職業訓練コースについて案内と説明を受けた。普通高校と同一の敷地内に設置されており、授業は一緒には行わないが休み時間は一緒である。知的障害生徒の職業訓練コースとして、芸術（美術、音楽）、自然（ガーデニング）土木・建築の3コ



ースがあり各生徒に職業コースの個人プログラムと活動計画を立てる。生徒数130名のうち90名がここで学んでおり、あとの40名は市内にある分校で学んでいる。こちらにも軽度自閉症を持つ生徒のクラスが2クラスあるが、分校は知的障害と自閉症を併せ持った生徒が対象である。スウェーデンでは自閉症の子どもで知的障害がある場合にのみ、基礎特別学校の（知的障害用の）教科学習グループで学ぶ事になっている。分校の子ども達は、数学、英語、自然（ガーデニング）をこちらの校舎に来て学んでいる。

校長室のある建物は事務関係の校舎から移動して、コミュニケーションのクラスを見学。手話法と絵（コミュニケーションボード 写真）を使用する。スイッチ（写真—奥の職員が持つ赤い丸がボタンスイッチ）なども使用している。

ブリス・シンボルのボードが見学した双方の教室の黒板の位置に大きく組み込んである。教室には、リソース教員（補助・補強教員？）も入って、生徒のサポートをしている。コミュニケーションクラスで働くリソース教員は、いろいろな生徒と関わる。ハビリテーションの教室等を見学し、土木建築の作業教室、美術・工芸の授業を見学した。

木工のクラスは軽度知的障害を持つ4年生が午前3名、午後8名学んでいる。いずれも肢体不自由がない。午前の授業では、担当教員1名に非常勤アシスタントが2名つき、生徒の様子を見ながら作品制作の補助をしていた。他校から注文を受けた演劇舞台装置を作成中であつた。普通高校の生徒と一緒に授業に週に1, 2回参加している。

すべての高校生に週1回の美術の授業があるが、この美術の時間では、今週のテーマである「文字」につい



て、自分で作りたい文字を題材にした作品を制作していた。自分で作りたい作品を決め、聞きたい音楽を自分で選曲する。

美術・芸術と自然（ガーデニング）のコースにいる生徒でレベルの高い子はナショナルカリキュラムのプログラムで学ぶ。

生徒に関する判定は、心理士が WISC, WAIS などで心理検査を行い、分析した結果と、医学的、社会的能力、学力なども加味して判定し、境界域の子は普通校で

学ばせるようにしているが、現在境界域に当たる生徒は在籍していない。ナショナルカリキュラムの教室では（知的障害の中で）優秀なレベルの子10名に2名の教員が付くが、実際の所、境界域の子がナショナルプログラムで学ぶのは難しい場合が多いのが現状である。学校の職員、教育委員会、保護者が、その子が学校に適さないと判断する場合があるが最終的には学校が決定している。自然（ガーデニング）コースで学んでいる子が普通校で援助を受けながら、科目の勉強をする場合もある。高校卒業後の就職はなかなか難しく、レストランやカフェで実習したり、実習成績書に基づいて、職業案内所が就職先を探す。



デイケアに行く場合は、給料は出ないが、手当が支給される。土木コースを卒業した後、建築会社に就職するケースもある。また自然（ガーデニング）コースでは、公園造園、墓地庭園の用務員などになる。

校内にある設備として注目したのは、タクティル（マッサージ）室であり、マッサージを受けられる。また、自動的に、車イスが目的地まで移動する、Akka Platta というレールが校内の廊下に敷設されていた。一部屋であるが、スノーズレンも設置してある。食堂は自分でメニューの中から、好きな物を選び取る方式で、3, 4種類のメニューがあり、菜食の人にも配慮がなされていた。食堂や図書室は普通高校の子どもと一緒に使用である。図書室には。スウェーデン語に翻訳された村上春樹の小説が沢山並べてあった。

学校には homevisit（ホームビストー学童保育）という制度があって、7:00~17:00まで学校にいらることができる。生徒によっては、休日の時にも、ホームビストが利用できる。ホームビストの部屋で



朝、昼、晩と食事をとることは可能であり、無料であるが長期休業中に利用するときは料金を徴収する。学校から6 km以上離れていると、バス定期支給やタクシーのサービスが受けられる。また通学に支援が必要な場合は、補助スタッフが付く。

この学校では、校庭のポールにスウェーデン国旗、マルメ市旗、日本国旗を掲げ、我々一行を歓迎してくれたのは嬉しい限りであった。（文責：神田 基史）

一生徒作品の紹介ー

木製ベンチ



文字をテーマにした作品



壁面の作品



男子生徒作成の織物



機織り機

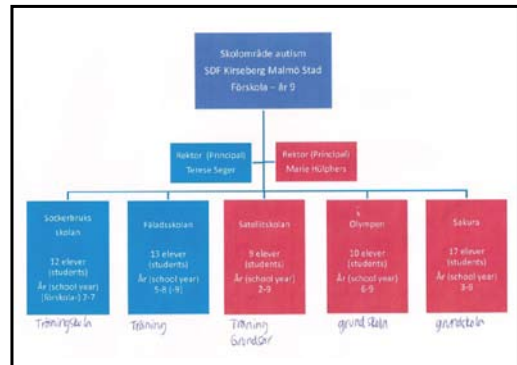


●視察報告 6：Fäladsskolan（自閉症児を受け入れている小学校）

この学校は、普通小学校と同じ敷地内にある自閉症児の学校である。学校の在るところには、普通小学校の他に、幼児の保育園も隣接している。

ここでは副校長の Sarah Jönsson さんからマルメ市の自閉症児童生徒対象の学校の設置状況もまじえて話を伺った。

校区には自閉症児のための学校が5校あり、2名の校長がいて、1名の校長が3校、他の校長が2校を受け持っている。全職員70名、全児童生徒は61名である。職員はすべて常勤の専門教育を受けた者ばかりで、アシスタントはいない。



就学前の子どもも含めた自閉症と知的障害を併せ持つ子どもの対象校が2校（生活訓練を中心に行っている）、高校生年齢の自閉症と知的障害を併せ持つ生徒の対象校が1校（生活訓練と教科学習の間くらい）、他の2校は自閉症のみの子どもの対象校（教科学習）である。これら5つの学校は障害の程度と発達段階ごとに設置されている。（図）

視察した学校には、マルメ市全体と周辺の都市から通学している5～9年生の児童が13名在籍しており、職員は14名である。

この学校における基本的な教育の方針は、

- (1) 自閉症に関する知識と、その子ども自身の実態の両方から子どもの全体を理解することを大切にする。
- (2) 個に応じた指導

①自閉症の人に対する環境面での保障

- ・教室環境の構造化
- ・感覚過敏への対応

その子どもに応じた自己調整の仕方やクールダウンの仕方を身に付けること

②コミュニケーション面での保障

- (3) 相手の気持ちや立場を尊重する肯定的なかかわり

- ・自己決定の場を設定し、子ども自身が自分で選択すること

例えば、子ども自身が教師の提案に対して、やりたくないなどの「NO」の選択に対して、も尊重し、受け入れるが、では何をやりたいのかを子ども自身が考えられるように積極的



に他のことを提案し誘い掛けるといった、教師、職員と子どもの（民主主義的）連携を大事にしている。

（４）家族、医療との連携

などである。子ども達は全員個人発達プログラム（IUP）を持っている他に、障害対策プログラム（援助プログラム）を持っている。指導については、TEACCHプログラムやPECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）など、自閉症児に対する様々な指導法を参考にしながらも、あくまで子ども一人一人の実態に応じた指導、かかわりを基本として行うということを強調していた。

教室内の状態を参観させてもらったが、壁には児童の作品が飾ってあったり、子ども一人一人の一日の予定を縦一列に掲示してあったりした。また、室内は、教師と一対一で個別の学習をする場所と、子どもが自分で棚から課題を持ってきて一人で学習に取り組む場所、ソファに座って本を読んだり、教師や友達とおもちゃで遊んだりするような休憩する場所とが設けられていた。教材などは子どもたちが自分で準備や片付けができるように棚に整理整頓されており、棚や引き出しには、文字やシンボルマークでの印などもつけられていた。さらに、子どもによっては一人で学習に取り組む際に集中できるように衝立などでエリアが仕切られているなど教室内が子どもたちの実態に応じた構造化がされていた。教室環境で配慮されている点は、久里浜特別支援学校と同様だとの感想をもった。また、この学校でも、子どもの興味・関心に応じてiPadやパソコンを使用した教材が用意されていたり、一室に小規模のスノーズレンの部屋が設置されており、スノーズレンの時間やタクタイル（マッサージ）の時間を設けたりしている。

普通学校との交流については、特に高機能自閉症の子どもは普通学校でイジメに遭うようなことがおこっているので、現在は行っていないとのことである。このところ移民が増加していることは少し影響が出ていると言っていたが、どのような影響かは詳細に触れなかった。



この学校に勤務する職員は、全員が正職員になる前に、Sunne 研修所で自閉症と初等教育について1週間の研修を受けた後、Autism&Asperger Förbundetで実習期間を経て、勤務を開始する。

また、先生たちは日本の自閉症教育にも関心をもった様子で、久里浜特別支援学校の教育の方針、子どもたちの様子や実践、課題点などを伝えると、お互いに共通する点なども多く、日本を訪問する機会があればぜひ見学してみたいとのことであった。

ここでの説明を聞く時に、室内は暗くないのにテーブル上に小型のキャンドルを数個ならべて、火をつけて置いたので、理由を聞くと、キャンドルの火は場の雰囲気や和らげたり、人の緊張感をほぐしたりする効果があるので、スウェーデンでは会議の時や家庭でもよくこのようにするとのこと、子どもたちとの休憩のひと時や我々の会議でも試してみてもはどうだろうか。(文責：加藤 敦)

●視察報告 7：Annebergsskolan(基礎学校と同一敷地内に併置されている基礎養護学校)

同校は、基礎学校と同一敷地内に併置される基礎養護学校で、知的障害のある子どもや重度重複障害のある子どもが通学する学校である。学校名は1つであるが、組織的には基礎学校と基礎養護学校にはそれぞれ学校長が配置されて区別されており、教室配置も棟を分けて構成されている。同基礎養護学校の在籍数は40名である。今回の視察では、重度重複障害のある子どものための学級及び知的障害のある子どものための学級を中心に授業見学し、学校長及び担当教諭から説明を伺った。同校では、今回の訪問先の中では唯一授業の様子や子どもたちの写真撮影等が許可された。



同校には朝8時前に訪問し、始業前に登校してくる子ども達の様子を見学させてもらった。同校にはhemvist(学童保育)が開設されており、同校に通う1年生～9年生の半数が利用、希望者には朝食も用意されているとのことであった。

授業見学は、重度重複障害のある子どものための校舎(平屋造り)から行った。ここには7名の子どもが在籍し、特別支援教育教師2名とアシスタント5名が配置されていた。指導形態は3名と4名に分けたグループ別指導が中心とのことであった。

最初の朝の会はグループ別に行われ、4名グループの方は当日1名が欠席、睡眠障害のある2名(双子)が遅刻のため1名のみで行われた。子どもにはアシスタント1名が寄り添い、担任のLena Westertröm先生が我々に解説をされながら朝の会を進められた。



まず始めに連絡帳にある保護者の記載事項(当日の健康状態等)を確認された後、朝の歌を歌いながら日付・曜日を確認。この時、マッチを擦って子どもの鼻先に近づけ、吹き消した後に残るリンの匂いを確かめることが行われた。Lena先生によれば、視覚(炎)と嗅覚(匂い)に働きかけて曜日の区別を促すために行っており、曜日ごとに提示物は替えているとのことであった(他にシナモンなど)。この日出席していた子どもには視覚障害があるため、炎には反応しなかったが、匂いには反応を示した。この曜日確認の儀式は、もう一方のグループでも行われており、言葉だけでなく広く感覚を刺激して学習を促そうとされる指導の一端が垣間見られたと感じた。このほか、曜日ごとに色が決められ、表示等に用いているとのことであった。

その後、音声録音機能付きスイッチ(ピックマックス

イッチ)を押すことで予め録音されている音声(アシスタントの声)を再生して朝の挨拶が行われた。ここでも、スイッチを本人が押すまで待とうとする姿勢が目立った。挨拶後は水分補給と少しの果物を口にし、この日出席の子どもは次のマッサージに向かった。マッサージは処方箋を持つ子どもに対し行われ、専門とする担当者によって個別に実施されるとのことであった。処方箋を持たない子どもの場合は、戸外(中庭)に出て外の空気を吸い、しばらくして教室に戻るそうである。

授業後、Lena 先生から次のような話をお伺いした。「校外学習では、海に行って海水につかるなどの体験学習を行っている。このような学習の様子は、週の最後にまとめて連絡帳に記入して保護者に伝えている。特別な支援を必要とする子どもにはアシスタントが付くが、子どもによっては家庭生活にもアシスタントが付く場合があり、その場合宿題や遊びをサポートしてもらっている。アシスタントが付いて、2週間に1回程度ショートステイをさせるご家庭もある。アシスタントは、親の敎示を受けて医療的な援助(痰の吸引など)を行っている(敎員も同様)。特別な支援を必要とする子どもには、ハビリテーリングのチームが個別にヘルスケアや生活訓練の計画を立案し、支援を行う。子ども別に生活訓練やヘルスケアについての計画を立案する。この学校の場合、すぐそばにある病院内にチームが組織されており、言語聴覚士、体育担当者、マッサージ担当者、心理士、学校カウンセラー、理学療法士が支援に当たっている。必要に応じて医師も支援に加わる。敎員は学期に1,2回ミーティングに出席し、教育に関する情報を提供するとともに、身体面に関するアドバイスを受ける。養護学校への入学基準はIQ70で、境界周辺の子どものはなるべく基礎学校に通学させることを基本としている。ダウン症の子どもの場合は、IQ70を下回っても10才程度まではなるべく基礎学校に通学させ、その後養護学校に転校させるということもある。基礎学校にも特別支援敎育敎師が少なくとも1名おり、学校カウンセラー、心理士、看護師も常勤している(ただし、学校医は非常勤)。障害の重い子どものための指導としては、言語指導や体操、ダンス、ムーブメント、摂食指導、生活指導が行われている。児童会活動などは基礎学校の子どもの一緒に行っている。敎科学習が可能な子どもは基礎学校で学ぶ。」とのことだった。



休み時間をはさんだ後、子ども3名(1名欠席)による音楽の授業を参観した。MTをオーサ先生が務め、四季の歌を歌うことから始まった。四季の歌は、メロディーは同じで、季節ごとに歌詞を替えて歌うとのことであった。子ども達はマットの上に降り、敎師やアシスタントが後方から支える体勢で活動した。子どもたちは、ギターの伴奏に合わせた歌声と共に体が揺れたり後方にのけ反ったりする感覚を楽しみながら活動している様子であった。なお、音楽の授業では演劇などストーリーのある表現活動も行っているとのことであった。



次に別棟にある知的障害学級の算数授業を参観した。知的障害学級には異学年で構成される5名が在籍しており、当日は1桁同士の加減算を学習していた。言語コミュニケーションが難しい子どもにはブリスシンボル表が用いられ、視線の確認を要する子どもには額にレーザーポインターを装着して、注視位置の確認を行っていた。

授業間に設定されている中休みになると、敷地中央の中庭に基礎学校の子ども達も多数集まり、思



い思いに遊ぶ様子が見られた。

午後には基礎養護学校を統轄する Lars Norlin 校長から、スウェーデンの特別学校について話を伺った。「教員採用は学校ごとに行っており、労働組合が時に介入することがある。採用当初は臨時の採用とし、その後正式に採用する。定年は65才だが、希望すれば67才まで勤務できる。他校への異動は基本的にない。特別学校で勤務するためには、教員資格のほか特別支援教育教師の資格が必要となり、取得していない場合は研修を受けて取得することができる。同資格を取得しないと正式採用とならない。養護学校への入学資格は知的障害の有無で判断され、IQ70が境界となっている。保護者参加のもと、マルメ市のリソースチームが心理アセスメント、学力検査、医学的調査、社会的スキル等の情報を収集して入学先の適否を判断する。ただし、学校選択はあくまでも保護者が行い、他校への転校も保護者の申請によって行われる。子どもの障害の程度は3段階（軽度、中度、重度）に分けられる。軽度の知的障害の子どもには、基

礎学校と同じ教科が指導されるが、基礎学校の目標とは異なる目標で指導される。一例を挙げれば、養護学校での言語指導は国語と英語（外国語）に限られるが、基礎学校では第2外国語も指導する、などである。知的障害がかなり軽ければ、基礎学校の学級（14名程度）に入って学ぶこともある。その場合は、基礎学校に1名配置されている特別支援教育教師がサポートする。過去6年間実施し、学ぶ子どもたちに社会性が育つ姿を見て、この取組が成功していると感じている。知的障害の程度が中度・重度の場合は、生活訓練の指導が中心となる。近年、基礎学校に境界前後の子どもの在籍数が増加する傾向にある。ADHD やアスペルガー等も6％程度在籍していると言われており、それらへの対応が課題となっている。IQ70を下回らないと養護学校に転校できないので、特別支援教育教師を中心に、学校に法定配置がされている学校カウンセラー、心理士及び看護師も協力して対応することになる。残念ながらこの学校には心理士が配置されていないが、全国を数地区に分けて各地区に設置される中央リソースセンターがあり、相談することが可能である。マルメ市のある地区の中央リソースセンターは6校を管轄している。」とのことであった。



この後、知的障害学級を担当する Etsuko Nilsson 先生の算数の授業（簡単なかけ算、時計の読み方）を見学させてもらった。同学級は異学年の子どもと一緒に学ぶ複式学級である。同校の在籍数40名のうち、7歳児4名

と9歳児8名の計12名が知的障害のある子どもであり、残る28名は重複障害のある子どもである。今年度の場合、障害が軽度で基礎学校の学級に入って学ぶ子どもはいないとのことであった。

以下に、Nilsson 先生から伺った話を記載する。「スウェーデンの義務教育段階にある全ての子どもには個別の指導プラン（IUP）が作成されることになっており、特別な支援が必要な子どもには個別の援助プログラムが別途作成されている。これらの書類には、学校の担当者と保護者が共に責任を持つ必要があり、子どもと保護者、学校担当者が署名することになっている。重度重複障害のある子どもの場合には、子どもの署名が無くてもよいことになっている。これら書類の見直しは、各学期ごとに（2学期制のため期間としては半年に1回）、関係する本人、両親、担任、課外活動担当者、（場合によって）校長がミーティングする機会を持ち、学習指導要領に照らした学力評価を行いながら



レベルをチェックして、内容の見直しを行う。同ミーティングに子どもも同席し、直接本人の意見も聞きながら行う。IUPには、国語、算数、理科、社会及び英語についての習得状況（レベル）が記載され、4年～6年生にはこのほかに図工、Housekeeping、家庭経済、技術（裁縫・木工）、体育、音楽の評価も加わる。教科によっては文章記述で評価されるものもある。教科の目標達成が見込めない場合に、援助プログラムが作成される。援助プログラムには、5つの事柄が記載される。①学力の習得状況及び進度。②子どもの長所（得意な力）。③援助が必要な課題。④当面の指導目標（算数：50までの減算ができるようにする、国語：1週間に5つ言葉を覚える、など）。⑤取り組ませる内容



（PCを使って計算する、毎日本を読む、自分で簡単な文が書けるようにする、など）や手だて（全体指導のほか個別指導の機会を設ける、など）。近年は説明責任を求められ、いくつもの書類作成が課せられるようになり、負担感が増しているように感じている。」とのことであった。個別の指導プラン（IUP）や、個別の援助プログラムがかなりシンプルに作成されている点が印象に残った。
（文責：西垣昌欣）

視察を終えて

平成24年7月23日、中央審初等中等教育分科会は「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」について報告書を出した。これによると、障害のある子どもが十分教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備、多様な学びの場の整備と学校連携等の推進、特別支援教育を充実させるための教職員の専門性の向上等などについて、留意すべき重要な提言をしている。また、文部科学省はインクルーシブ教育システムの構築に向け、就学先決定に係わる学校教育施行令の改正を検討している。こう言った状況の中で、インクルーシブな教育が自明の理とされていると言われるスウェーデンの実情を実際に見聞することは、国情や社会的背景の違いを超えたインクルーシブな教育の普遍的部分と、それぞれの国情に合わせたインクルーシブな教育の構築と言う観点を考える意味で、意義のあることだと考えこの視察を実施している。

第一に、スウェーデンでは特別支援学校（スウェーデンでは養護学校）は校庭を挟んで、普通学校と同じ敷地内に設置されている。また、この特別支援学校の対象の児童生徒は基本的に IQ70 をボーダーとして分けられる。IQ70 以上であればいかなる障害を併せもついても普通学校で教育を受けている。また IQ70 以下であれば、養護学校の対象とされる。しかしこの決定は保護者も交えた心理士を含む複数の関係者の話し合いで決定され、見直しのシステムもあり、養護学校の対象であっても教科によっては普通学級へ行って学習をしている。

第二に、特殊学校対象として分離されるのは、(IQ70 以上の) 聴覚障害や視覚障害等を併せもつ児童生徒であり、ここでは手話などの“特殊”な教育をするので特殊学校 (Special School) と称されているが、普通学校と同じカリキュラムで進められる。参観した Östervångsskolan は3年後に普通学校と併置の形の移転を計画しており、話せる子どもは、話せる環境に置くという副校長の説明は、インクルーシブの理念の具現化である。今後の日本の学校の設置環境を整える上で示唆を与えられる。今回は視覚障害の児童生徒に対して、普通学校や養護学校で具体的にどのような対応が行われているか参観できなかったのが残念だが、知的に問題がなければ普通学校の中で必要な支援をしながら、また知的な遅れを伴っているならば、養護学校で教育するという原則は貫かれているようだ。

第三に、すべての子どもに「個別の指導プラン (IUP)」が作成され、知識レベルの基準に満たない子どもには別個に「援助プログラム」が用意される。そして子どもの障害にそってアシスタントが付けられるなどの配慮がある。これらの指導計画の内容は曖昧なものでなく非常に具体的でわかりやすい。また本人も話し合いのチームに参加させるなど、本人の意思決定を重要視している点は、自己実現の視点として重要だと考える。本人が話し合いに参加する理由は、「自分の人生に責任をもつ」からだと言う。個人の責任に対する尊重がスウェーデンの民主主義の基盤である、と教えられた。また、重度障害をもつ子どもには理学療法士、言語療法士、医療関係者、心理士を中心にした「専門家チーム」が生活訓練 (ハビリテーション) のプログラムを作成して対応しており、学齢であれば担任と連絡をとりながら進められ、卒業後は地域の施設を利用する中で、生活訓練支援の体制がとられている。文科省では学校で外部専門家の有効活用を提唱しているが、教育との連携の取り方が難しいなどの課題があるところ、効果的な活用の仕方について、このハビリテーションの専門家チームの学校との連携の取り方などは参考になるだろう。(今回、内容について詳細な情報が得られなかったのは残念である。) また、我が国の特別支援学校学習指導要領にある「自立

活動」の分野における考え方など（なかんずく、肢体不自由教育の自立活動について）も紹介し意見交換が出来れば良かった。

以上短い視察であったが、この中で印象的であったのは、すべての子どもの教育と福祉を国が支えるというスウェーデンの制度である。そして学んだのは、①国家の福祉体制と教育の在り方やインクルーシブな教育の実相は大きく連動する、そして②教師、アシスタント、心理・福祉・医療職など、多様な援助者の雇用や活用も、国の福祉体制と関係するということである。（教育費の家族への負担の有無、将来年金の有無、医療費が覚束ないというような状況は、教育内容や体制に有形無形の影響が大であろう。） 今後は、日本においても、日本の福祉体制の特徴を活かしながら、また福祉体制のさらなる整備に向けて発言しながら、日本におけるよりよい教育、インクルーシブな教育の実現にむけて努力したい。（文責：石隈利紀、吉沢祥子）

〔参考文献〕

平成22年度障害のある児童生徒の就学形態に関する国際比較調査報告書 第4章スウェーデン
—内閣府—

4 おわりに

未来に向けて

附属学校国際教育推進委員会副委員長 吉沢 様子

“山川域を異にすとも、風月天を同じくす。諸仏子に寄す、共に来縁を結ばんことを。”養老元年(717)、第8次遣唐留学生阿倍仲麻呂らが携行する贈呈品、千領の袈裟の縁にはこのメッセージがあった。先進的な唐文化の摂取、唐を中心とした東アジア情勢の情報収集など、律令国家体制の整備のための限られた階層での国際交流である。他国との関係で友好を願うのは、洋の東西、時代を問わず国家、個人の安定、平和、繁栄の基本であろう。今日、人々の関わる事象や環境は、当然ながら当時とは比較にならない。地球規模で動き日々激変して行く社会に生きる我々は、友好、友情を基盤として異文化を理解、尊重し、共生を目差す上で、相互理解を促す明確な発信力や、人類貢献に通ずる重厚な存在感を示すことが必要であろう。先日のあるTV番組では、フィリピンミンダナオ島の奥地に渡り、部族酋長として様々な年齢の子ども120人余りの生活を援助し、住民の信頼を得ている日本人、モザンビークで現地で知った5歳の男の子を養子にして、現地人のための雇用創出を工夫しながら商売を営み20年になると言う日本人などを紹介していた。どちらも、日本での紆余曲折を経た苦勞の末、外国を主生活の場とすることを決断されたのだが、驚いたのは二人とも既に若いという年齢を過ぎて海外に渡ったことである。年齢などに躊躇せず、“人生至るところ青山有り”と、果敢に踏み出して行く姿勢は尊敬に値する。また、自分達の生活もさることながら、その土地の人々の価値観を重視し、常に現地社会に寄与できることは何かと、独創性に富む様々な工夫をしていることにも感服した。

今、政治・経済・産業・科学・教育あらゆる分野が、地球規模のネットワークの上で動いている。グローバル社会の奔流の中で、危ぶまれる地球環境の保全、新型ウィルスや`難治病に対する医療方法の開発、新エネルギーの構築等々、様々な課題をこれからの若い世代は克服して行かなければならない。21世紀を、また、更なる未来社会を創造進展させて行くためには、自立した自己に基づく相互理解と共生、協働の理念は欠かせぬ土台であり、人種や国境を超えた国際連携は無くしてはならぬ手段であろう。むろん、それを支え維持する高度な知識、技術、高邁な見識、哲学も必要だ。教育が関与する所は重大である。このことを鑑みれば、若い世代が学校教育の中で外国語を学ぶことや、他国の学校との交流を通して、友情を暖め異文化を知ることは、広い視野を備えるべき彼らにとって、その地道な足がかりの大切な一歩である。旺盛な知的探求心、豊かな感性、柔軟な思考、深い洞察力、試行錯誤する持久力などを併せ持つ強靱な底力を蓄えることが肝要だ。これらが結実して行くことで健全な国際社会が作られて行くだろう。友好を保ち、同時に国際競争にも耐えうる若い世代の“体力”を涵養するため、学校は健闘しているのである。

この報告書は、偏頗な独善に陥らずバランス感覚の良い視野を持ち、世界に向けて発言できる行動力ある人間を育てるために、国際教育として今筑波大学附属学校11校ができることを考え、児童・生徒、教師ともに努力している事績を纏めたものである。皆様の努力に敬意を表すると共に、様々にご協力頂いた多くの方々に深く感謝申し上げたい。

平成24年度附属学校国際教育推進委員会名簿

委員長	東	照雄	附属学校教育局教育長
副委員長	松本	末男	附属学校教育局教授（教育長特別補佐）
副委員長	吉沢	祥子	特別支援教育研究センター教諭
	宍戸	和成	附属学校教育局教授
	木村	範子	附属学校教育局講師
	鷺見	辰美	附属小学校教諭
	久保野	りえ	附属中学校教諭
	中塚	義実	附属高等学校教諭
	八宮	孝夫	附属駒場中高等学校主幹教諭
	工藤	泰三	附属坂戸高等学校教諭
	黒岩	聡	附属視覚特別支援学校教諭
	山本	晃	附属聴覚特別支援学校教諭
	本間	貴子	附属大塚特別支援学校教諭
	山本	喜洋子	附属桐が丘特別支援学校教諭
	赤松	泉	附属久里浜特別支援学校主幹教諭
	野村	勝彦	特別支援教育研究センター教諭